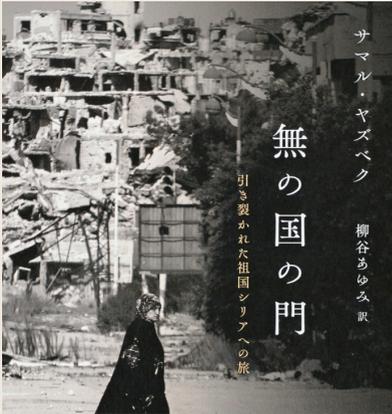


第二部

サマル・ヤズベク

『無の国の門——引き裂かれた祖国シリアへの旅』を読む



「神さまにかけて誓う？ 私が言うことを、
世界中に伝えてくれるって」

内戦下のシリア。祖国を離れた作家が一時帰還し、
絶え間ない爆撃の下、反体制派の人々の間で暮らしながら、
同胞たちを訪問し、それぞれの苦悩と挫折に耳を傾けた一年間の記録。

語り伝えることを通じて、内戦という過酷な現実と向き合う試み。
世界 16 か国で翻訳された記録文学の白眉！

白水社

【著者プロフィール】

サマル・ヤズベク (Samar Yazbek) 現代シリアを代表する小説家・ジャーナリスト。一九七〇年、シリア・ラタキア県ジャブラ生まれ。一九九九年に短編集『秋の花束』を刊行後、文筆生活に入る。民衆蜂起の最初の四ヶ月を記録した文学的ルポ『交戦』(二〇一二年)は、国際ペンクラブ・ピンター文学賞「勇気ある国際的作家」を受賞。最近では小説『歩く女』(二〇一七年)、文学的ルポ『十九人の女たち』(二〇一八年)を刊行。諸作品は二十数カ国語に翻訳されている。



3 著者からのメッセージ

聞き手 岡崎 弘樹

岡崎 最初にインタビュ어의趣旨について説明させていただきます。アラブ文学の翻訳者に関しては、英仏語への訳者と比較して日本語への訳者の数が限られております。それゆえにサマルさんの著書ももっと早く日本語読者に届けたいと望んでいたのですが、なかなか実現しませんでした。ですが、今年サマルさんの著書として初めて『無の国の門』が日本語に訳され、出版されました。本書が日本の読者を満足させ、サマルさんの著書のさらなる翻訳が促されるように祈っております。私は『シナモンの香り』など複数の作品を読みましたが、その他の著作も含めて日本語に訳される必要があると思います。ということ、今回の出版に際し

まして、はじめに日本語読者へのメッセージをお願いします。

サマル アラブ文学、特にシリア文学へのご関心、そして私の著書へのご関心に、また今回のインタビューに感謝いたします。日本語版の出版については、とても嬉しいです。本書の刊行は人生の大きな出来事でした。小説ではありませんが、日本の読者は本書を通して、シリアで起きた悲劇を理解することができるでしょう。アラブ世界の女性作家の作品を通して、シリア国民の悲劇を垣間見ることでしよう。書くという行為は小説であれ記録文学であれ、文明間に横たわる「悪」、すなわち「固定観念」を解きほぐします。それは日本のようにシリアから遠く離れた国にとっては特に重要な点です。本書は戦争の真つ只中で、その最前線で書かれました。それは私にとって重要なことでした。日本の読者の反応がすごく待ち遠しいです。

岡崎 「悪しき固定観念」を解きほぐす、本当に必要なことだと思えます。過去数年間にわたって『娘は戦場で生まれた』¹や『カーキ色の記憶』²、『ホムスに帰る』³などのシリア映画が日本国内でも上映されてきま

1 『娘は戦場で生まれた』(For Sama) ワアド・アルカタイーブ監督が二〇一一年から五年間にわたって戦場のアレツポでの自身の経験を撮影したドキュメンタリー。二〇一九年公開。日本では二〇二〇年に公開。

2 『カーキ色の記憶』(A Memory in Krak) アルフォーズ・タンジュール監督。バアス党政権下での抑圧された政治や社会を監督と四人の語り手を通して描くドキュメンタリー。二〇一六年公開。二〇一七年山形国際ドキュメンタリー祭で山形市長賞(最優秀賞)を受賞。

3 『ホムスに帰る』(Return to Homs) タラール・デルキー監督。シリアのサツカー・ユース代表のゴール・キーパーであったアブドゥル・バーセル・サルルートが二〇一一年以降に抗議デモに加わった後に弾圧を受けて武器を持って戦わざるを得なくなつた様をとらえたドキュメンタリー。二〇一三年公開。日本では『それでも僕は帰る——シリア 若者たちが求め続けたふるさと』という題名で二〇一五年に公開。

した。それらは悪しき先入観を解きほぐすことに文化的に貢献したのかと思います。とはいえ、シリア作家の著書が翻訳され、紹介されるのも大切ですね。著書であれば、読者がいつでも好きなときに開くことができますし、作家の側もテーマを掘り下げることがができます。ですからサマルさんの著書は、日本語読者に感銘を与えることができると考えます。

ところで文学に関する議論に入る前に、サマルさんが関わっている団体の活動について基本的な情報や知識をいただきたいです。サマルさんは革命勃発時に支援団体「今こそ女性」(ニサー・アルIIアン、Women Now For Development)⁴を設立されましたが、設立の経緯と活動内容について説明していただけるでしょうか。

サマル 二〇一二年、シリアで暴力が激化し始めたとき、アサド政権は都市を爆撃して、人々を拘束しましたが、同時にイスラーム主義者のグループがトルコやイラクから国境を越えて侵入しました。戦争の中で政治活動はほとんど頓挫していました。暴力と戦争の中では何もできません。(戦争の被害や人権侵害を)記録する活動だけでも不十分です。社会で最も被害を受け周縁化された人々と共に活動すべきだと考えました。それがまさに女性でした。女性たちが戦争の中で生活を創り出していたのです。私は戦火の下に置かれた女性のエンパワメントや支援、育成のための団体を立ち上げました。

小規模のプロジェクトを通じて女性の経済的な能力を育むことを目指しました。技術的な面では、コンピュータの使い方を覚えることが識字率の上昇につながります。郊外や地方には読み書きのできない方がいるので識字教育が必要となります。英語やフランス語など外国語も学びます。今の時代は昔と違って、外国語も学ぶ必要があります。心理的な支援も行います。監獄で強姦されたり、暴力を受けた女性たちがい

ます。

もともとシリアは男尊女卑の家父的な社会であったところに戦争が起きたのですが、ジハード主義勢力が女性の権利をないがしろにする支配を押しつけました。政権だけではなく、ジハード主義勢力からも激しい暴力を受けたのです。ジハード主義勢力はシリア社会を根底からひっくり返し、本来存在しなかったような支配を押しつけました。彼らの暴力は過酷でしたから、私たちは女性の心理的な支援を行わなければなりませんでした。

この三年間においては研究調査分野にも携わっています。女性たちが戦火の下で置かれた現実に関して、女性たちの手による調査報告書を発表しています。人権擁護活動にも関わっています。強姦された女性を保護したり、女性への公正を求める運動を立ち上げたり、シリア国内と国外で女性たちの集会を催したりと、あらゆる分野への支援を行っています。人権擁護や司法面も含めたあらゆる分野を支援する女性の幅広いネットワークを有しています。

つまり二〇一二年から二〇一七年にかけては女性たちの経済生活を成り立たせ、また心理面や知識面、文化面でのサポートを活動の軸としていましたが、それに加え二〇一七年以降には調査報告や人権擁護にまで活動の幅を広げ、発展させたのです。

岡崎 なるほど。シリア国内にとどまる方だけでなく、国外にいる女性たちも団体の活動に貢献されているわけですね。

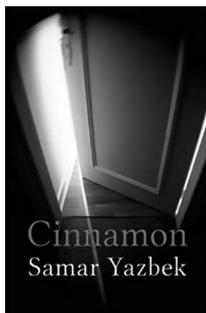
4 詳しい活動内容は、<https://women-now.org/>を参照。

サマル ももちろんです。特にレバノンやトルコに滞在している方です。ともうしますのも、私たちが調査を行うのは、シリア人女性が実際に生活している難民キャンプがある地域だからです。私たちは、最も貧しく、最も被害を受けている人々を支援しているのです。それはまさに難民キャンプの女性たちです。

岡崎 最近では新型コロナウイルスの問題に直面していらつしやるのでしょうか。難民キャンプ内の状況はどうなのでしょう。

サマル コロナ・ウィルスは難民キャンプに限らず、シリア国内全域に広がっています。それは百も承知していて、いくつかの対策を練りましたが、率直に言って、対応は不十分だと言わざるを得ません。私たちだけではなく、シリア人皆にとつての問題です。支援も資金も計画もなく、正確な統計もありません。政権支配地域でさえも同じです。政権の支配下で暮らす人々は、毎日朝から晩まで、長きにわたる戦争の中で暮らし続けています。政権の支持者であれ、反対者であれ、同じです。生活は困窮を極めていますが、コロナ問題については事態の詳細をつかめない状況です。

岡崎 分かりました。それでは、文学についてもお聞きしたいと思います。最初、最初に革命以前に関するのですが、サマルさんの作品で最も有名になり、広く読まれたのは『シナモンの香り』(二〇〇八年)かと思います。



『シナモンの香り』

英仏独語などいくつかの言語にも訳されていますが、私もこの小説を読んでとても感銘を受けました。先ほどおっしゃったように、サマルさんは活動においても難民キャンプの最も貧しい人々に焦点を当てていますが、『シナモンの香り』でもシリア社会のさまざまな側面に目を向けています。単に家父長主義的な伝統だけではなく、富裕層と貧困層のギャップ、さらに宗派主義の問題までも描写に加えています。おそらく二〇〇〇年代においてサマルさんはシリア文学の新境地を開拓されたと思いますが、いかがでしょうか。

サマル 『シナモンの香り』は新しいと同時に異例の作品でした。私は創作を始めたときから、「文学とは現実を変える営みの一環だ」と常に信じてきたし、今でもそう信じています。もともと革命以前から私はシリアの政治状況や女性の権利に関心がありました。私の作品は私の人格や関心の一部なのです。

実際のところ、『シナモンの香り』よりも私の好きな作品は『粘土』(二〇〇五年)⁶ですが、『シナモンの香り』の方が評判になりました。アラブ世界で広く読まれたと同時に、反発ものものすごく強かったです。ともうしますもの、この作品は誰も語りたがらないことを語ったからです。女性どうしの同性愛を描いたからというわけではありません。性的な関係のことだけでなく、富裕層による貧困層の支配、それに加えて主



『粘土』

5 『シナモンの香り』(二〇〇八年) ダマスカスの貧しい女の子が富裕層の家庭で家政婦として働きながら、女主人やその夫と性的な関係を築き、苦悩していく模様を描いた作品。

6 『粘土』(二〇〇五年) 軍人がシリアの政権を掌握すると同時に旧来のブルジョワ層だけでなく社会全体が崩壊していく模様をファンタジーも含めて描いた作品。

人公のメイドの女の子が自分の人間性を見出せる唯一の安全な場所を得たのは、(女主人との) 肉体関係を通してだったということについて語っている作品です。こうした描写はアラブ社会において異様であり、受け入れられるものではなかったのです。

しかし、女主人と貧しいメイドの関係は常に起こりうることです。ですから、文学をめぐっては美学的、芸術的な価値に加えて、「文学が現実を変える」、または「文学が社会を想像させる」ことも大切だと考えます。社会的な課題から極めて遠く離れ、美学に埋没することも必要ですが、同時に現実を変えていく一部となることも重要なのです。『シナモンの香り』を執筆した後、極めて辛辣な批判にさらされましたが、この作品に誇りを感じております。短めの小説ではありますが、メイドの女の子が「人間性の抑圧」を経験しながら野蛮な存在へと変貌した瞬間について凝縮した形で語っているのです。

岡崎 なるほど。それでは、少しシリアの女性作家の歴史について聞かせてください。サマルさん以前にはコレット・ホーリー⁷やガーダ・サンマーン⁸といった作家がいらつしやいまして、一九六〇年代から七〇年代、さらに九〇年代にいたるまで活躍されました。とはいえ、エジプトの女性作家と比較すれば特に一九八〇年代から九〇年代においては、シリアではそれほど名の知られた女性作家が存在しなかったのではないのでしょうか。シリアでは一九七〇年代以前に活躍した女性作家と後続の世代の作家の間には「断絶」があるようにみえますが、いかがでしょうか。

サマル その意見には同意します。アサド政権は一九七〇年に政権を軍事的に奪取したわけですが、それ以前から女性作家は周縁化された存在でした。ウルファト・イドリビー⁹やコレット・ホーリー、ガーダ・サ

ンマーン、詩人のダアド・ハッダード¹⁰などがいましたが、女性作家の数は少なかったのです。とはいえ、(八〇年代以降には)もちろん女性作家の場合もつと顕著でしたが、女性に限らず男性作家においても文化的な後退が起きました。一方、エジプトは確固とした文化的な伝統が受け継がれてきました。

しかし、二〇〇〇年代初頭にこうした文化的後退は終わつたと思います。この意見に同意されるかどうかは分かりませんが。当時、シリアで新しい世代の女性作家が台頭しました。私はその一人です。ローザ・ヤシーン・ハサン¹¹やマハー・ハサン¹²、マンハル・サツラージュ¹³がその代表格です。今ぱつと名前が出てこないですが、その後にもシャフラ・ウジェイリー¹⁴などの女性作家が活躍し始めました。新しい世代の若手の

7 コレット・ホーリー(一九三二年〜) 国家独立期を担ったファアリス・ホーリー首相の孫娘として生まれ、国民的詩人ニザール・カッバーニーとの恋仲の日々を描いた『あなたと共に』(一九五九年)などで知られる。

8 ガーダ・サンマーン(一九四二年〜) シリア大学(現ダマスカス大学)学長を父とし、『あなたの瞳が私の運命』(一九六二年)でデビュー。初期フェニズム作家の一人として知られる。八〇年代半ばにパリに移住。邦訳された作品として、『猫の首を刎ねる』岡真理訳、池澤夏樹編集『世界文学全集第3集 短篇コレクション』河出書房新社、四六七〜四九三頁がある。

9 ウルフアト・イドリビー(一九二二〜二〇〇七年) フランス委任統治時代に保守的な家庭に生まれた娘を描いた『ダマスカス』悲しい微笑み(一九八二年)などが代表作。

10 ダアド・ハッダード(一九三七〜一九九一年) シリアの女性詩人。代表作に詩集『私は詩の激しさに泣いている』(二〇一七年)など。

11 ローザ・ヤシーン・ハサン(一九七四年〜) ダマスカス大学で建築学を学んだ後、一九九八年からジャーナリストとして活動。短編小説集『光で汚された空』(二〇〇〇年)で小説家デビュー。三作目の『空気の保護者』(二〇〇九年)はアラブ・ブッカー賞の最終候補作となった。二〇一二年にドイッに亡命。

12 マハー・ハサン(一九六六年〜) クルド系シリア人の女性作家。『無限——他者の評伝』(一九九五年)などが代表作。二〇〇〇年にシリア国内での著作出版が禁止され、二〇〇四年にパリに亡命。

13 マンハル・サツラージュ 代表作にハマ事件を描いた『まるで川のように』(二〇〇七年)

14 シャフラ・ウジェイリー(一九七六年〜) シリア人とヨルダン人の父母の下で生まれる。アレppo大学で近代アラブ文学の博士号を取得し教鞭をとる。代表作に『猫の目』(二〇〇九年)など。

女性作家が集団として現れたのです。その話ももう二十年前なのでもはや現在では「若手作家」とは言えないでしょうけれども、当時は私たちも二十代や三十代前半でありましたから（笑）。

シリアにおいて重要な女性作家の新しい一団が生まれたのは、正確には一九九〇年代半ば以降だと思えます。現在にいたるまでに二、三十年以上前の「抑圧された時代」を補うほどに女性作家が活躍するようになったとは言いません。それほど女性作家がいるわけではありませんから。とはいえ、私たちの世代が書いたものは、政治面であれ、社会面であれ、タブーに挑む上であらゆる面で勇敢であったのは確かです。私たちの次の世代もきつと同じ取り組みに邁進すると確信しています。

いずれにせよ女性作家の「文化的な欠如」は、そもそも私たちの社会が男尊女卑であることに起因しています。（世界全体でも）女性作家が小説を書き始めたのは、百年、二百年、三百年、四百年前くらいからでしょう。とりわけアラブ世界においては、女性の状況に関しては私たちが本気で取り組まなければならない問題です。もし誰も語ることを許さないタブーについて語る女性作家が存在したら、どのように思われるのでしょうか。

家父長主義的な社会は深刻な問題ですが、アラブ世界の有識者層ですらも、この問題を抱えています。もちろん例外的な男性の知識人は常に存在しますが、一般的に言えることですが、知識人層であっても女性を（性的な意味での）「女性」としかみていないのです。知性を働かせる存在として女性を見ることはないのです。ですから、この「欠如」が起こるのです。政治や社会、宗教、そして有識者層の抑圧の中で、私たち女性は生きているのです。

私たち女性作家の大半は一九九〇年代半ばから書き始めましたが、社会的な実践を通して解放を求めて立ち上がったのです。私は十七歳のときに家を出ました。制度的な意味での、家族に従う形での結婚はしませ

んでした。他の女性作家も同じ「社会革命」を実践しました。私たちの個人としての人生は文化的な取り組みと結びついていたのです。ですから、率直に言いますが、これらの新世代の女性作家たちを誇りに思っています。著作であれ、社会生活であれ、「革命」はちよつと大げさかもしれませんが、「質的飛躍」を成し遂げたのです。エジプトやレバノンに比べてシリアはいつそう遅れた地域でした。ですからシリアの女性作家はいつそう厳しい困難に直面したのです。

岡崎 サマルさんの作品は女性が主人公で、女性の視点で語られ、シリア社会でそれまで光の当てられなかった側面を明らかにしています。これはよく分かります。サアダッラー・ワンヌースという偉大な劇作家がいますが、たとえば彼の戯曲で『強姦』（一九八九年）という題名ものがあります。たとえば女性作家であれば、同じ主題であつてもそもそも「強姦」という題名をつけることはないのでしょうか。男性作家は、繊細な感覚を描こうとするものの、常に歪曲しているのが事実だと思います。センシティブな課題や感情が曲解されていると常にご感じます。ですから、サマルさんは主人公を女性として女性の視点から語ることに固執されるのでしょうか。

サマル もちろん固執しますよ。私は女性です。率直に語っているだけです。女性として、女性たちの痛みを伝えているのです。また私は男尊女卑が、男性だけの脳裏に巣食っている問題だとも思っています。そうではなくて、システム（仕組み）を問題にしているのです。女性も男性支配の社会を支えているのです。とはいえ、私はシリアやアラブ世界の女性に関しては、最も抑圧され、被害を負っている存在として描いています。「セカンド・クラス」（副次的な存在、階級）の市民として扱われているからです。

今、いい例を挙げていただきましたが、私たちは本当に深刻な問題を抱えています。中東地域、いやシリアだけの話にしましょう。あまり一般化せずに（笑）。シリア革命の前ですら解決できない問題だけでした。私たちは人権擁護活動に関心を寄せたわけですが、その人権に女性の権利も含まれていました。その後革命が起こり戦争へと移ったわけですが、問題は倍増しました。私が小説で、また市民社会の活動で、政治的な取り組みで、講演で、エッセイで、家父長主義的な社会を扱うことに固執するのも、「社会的公正」に関心を寄せているからです。女性が抑圧されているのは分かっています。女性を擁護することが私の取り組むべき大義なのです。ですから、活動の主軸になっています。女性の権利が人間の基本的権利の一部であることは否定できません。

岡崎 要するに「公正」かどうかという問題ですね。

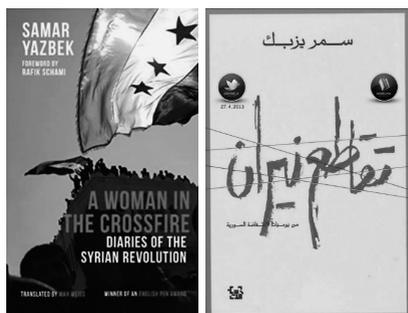
サマル そうです。私は「男がみな悪い」という急進的な立場ではありません。むしろ基本的権利を擁護するというのであれば、女性の権利も擁護しなければならないと単に言いたいのです。シリアであれ、いやアラブ世界としても言えると思いますが、私たち女性は法律的にも、憲法上でも、社会的にも奴隷のごとく「セカンド・クラス」として扱われます。ですから、解放されたいと思うのです。私たちは奴隷ではないのです。

岡崎 シリアの法律上では「男女の公務員は同じ給料」と定められているように男女平等はタメエとしてありますが、社会の現実とは全く異なるということですね。

サマル たとえばフランスでは、たいてい男性の給与が女性の給与よりも高いです。しかし、社会的には女性性は個人として自由を享受できます。一方、シリアでは公務員が同じ給与であったとしても、社会的には女性性は制約の中で生きています。家族の伝統や男性からの目線、シャリーア（イスラーム法）に基づく伝統的な秩序、（旧態依然とした）原理原則によって制約されています。私たちに必要なのはこの原理原則を変えらることです。私たちはイスラーム法の秩序ではなく、市民法に基づく原理原則（憲法）に依拠しなければなりません。そうなれば慣習はいずれ変わっていくことになるでしょう。

私の問題は特定の男性との関係ではなく、原理原則との関係にあります。平等を重んじる法を望んでいるのです。慣習や習慣を変えるには時間がかかります。私たち女性はそれぞれまず個人として革命を起こし、変化を引き起こさなければなりません。原理原則が問題なのです。イスラーム法の秩序に依拠したくはないのです。

岡崎 革命後の作品にも触れたいと思います。『交戦』（二〇一二年）¹⁵を執筆する際には新しいスタイルをとられました。英語では「Literary Narrative」（文学的物語）として分類されています。それまでは小説を描かれましたが、革命という未曾有の瞬間において、いかなる文脈の中



『交戦』

¹⁵ 『交戦』は二〇一一年の民衆蜂起勃発後、サマル氏が弾圧されながらも人々との連帯を模索し続け、しかし最終的には国内に留まることが不可能となった一連の流れを「文学的物語」として描いた作品。

で、新たなスタイルを選ぶことを決心されたのでしょうか。

サマル 政権側のメディアがひどい歪曲や嘘つきを続ける中で、私は作家として真実の一部を担う義務があると決意しました。だから『交戦』や『無の国の門』（二〇一五年）を書いたのです。『十九人の女たち』（二〇一八年）¹⁶を書いたときには、真実の隠蔽や嘘つきが「反体制派」とされた勢力の側でも行われていました。そこで女性たちに、全ての勢力のことをぶちまけてもらったのです（苦笑）。記録の形式で書くのは私にとって新しい試みでした。私は小説家で、ジャーナリストで、女性の権利を擁護する活動をしてきましたが、記録文学を書いたことはありませんでした。革命の真つ只中で、そうせざるを得ない瞬間が来たのです。

それは辛いことで、小説家としての私の存在に反することでした。私には芸術家としての感性があつて、芸術家というものは戦争の中に存在することはできないのです。それはすごく困難なことでした。心理的に辛いことでした。今もそうです。それでも真実の一端を明らかにするために書いたのです。というのも、最初から自分たちが奈落の底に向かつていると分かったからです。奈落に向かつていたのであれば、確固たる真実を明らかにする必要がありますのです。

岡崎 同時に文学としてのレベルも維持しなければなりませんね。『無の国の門』は実名で書かれている場合と、もしかしたら未だに内部にとどまる人々に危険が及ぶのを避けるために名前を変えている場合もあるとは思いますが。

サマル ほとんどは実名です。それが通称か愛称の場合もあります。

岡崎 こうした瞬間には、世界の読者が歴史的にも複雑な現実を知る上での「信憑性」が求められ、信頼してもらふ必要がありますね。ジョン・リードの『世界を揺るがした十日間』などがよく知られています。『記録文学』と言われている分野です。サマルさんの場合は、(ジャーナリスティックなスタイルというよりも)記録と文学とうまく調和させているところに特徴があると思います。とはいえ、それまでは小説家でしたから、独自の苦悩があつたのではないでしょうか。

サマル とても重要なポイント、センシティブな課題に触れました。『十九人の女たち』は文学的なものではなく記録そのままですが、『交戦』と『無の国の門』を書いたときですかね。自分の中の真実、身体の一部となつているものを表に出して表現することはできませんでした。というのも、私は小説家ですから、文学の言葉でしか書くことしかできないのです。私は文学者です。自分にとって絶対的真実とは、私は小説家であるということです。それは他に変えようのない真実です。

ですから、特に『無の国の門』を書いたときは辛かったです。虐殺、爆撃、子供や女性が死んでいく姿を、中立的な視点で書くことはできませんでした。私自身が感じたように書きました。私の感じたことを書きました。私自身が観察者だったのです。人々の証言を集めました。同時に私自身が観察者となつたのです。『無の国の門』の中で私は、自分が「唯一の架空の人物」だと書きました。自分は語りの中に生きる存在だと考えたのです。これほどの暴力について書くためには、それは必要なことでした。あの暴力について

16 『十九人の女たち』は、サマル氏が革命に参加しながらもその後アサド政権だけでなくイスラーム主義者にも抵抗した女性たちの証言を集めてまとめた記録。

たやすく書くことはできません。文学のおかげで私はこの暴力について、残酷さをいつそう和らげた形で書くことができました。だから文学として書いたのです。文学とは生の美学の一部分を成すものだからです。

ですから、この作品を小説家として書いたのです。それは自分にとって極めて辛いものでした。現実にもっと忠実とならなければならなかったし、同時に小説家たる自分にも少しでも忠実でなければなりません。こうしたバランスはとても難しいものでした。

岡崎 大変良く分かりました。いずれにせよ、『交戦』と『無の国の門』は非常によく読まれています。戦争によって、世界の人々はサマルさんの作品をこれまで以上に読みたいと望んだのだと思います。『交戦』はフランス語版の方がアラビア語原書よりも先に出版したかね。

サマル いいえ。多分同時期に出されたと思います。九年前のことですから、正確には覚えていません。

岡崎 そうですか。いずれにせよ、当時はサマルさんの作品に対する需要が高まりました。

サマル ご存知のとおり、戦争になると世界中で宣伝やメディアの素材が必要とされます。シリアで戦争が始まって、『無の国の門』は二十カ国語に翻訳されました。『交戦』は十七カ国語だったでしょう。シリアの問題は非常に新しい主題だったので、戦争や女性に関する著作に大きな注目が集まったのです。戦争が起って、それについて書けば注目されます。

アラブの作家にとって問題なのは、世界の人々が私たちを文学者として見ようとしないうことです。



『歩く女』

私たちを題材として見ているのです。サマル・ヤズベクについても、その小説についても何も知らないのに、シリアの戦争について書かれたものは何もかも翻訳するのです。このテーマはよく売れるからです。思うに現在に到るまで、欧米でも世界中のどこでも、文学者として読まれているアラブの作家は一人もいません。ナギーブ・マフフーズでさえ、ノーベル文学賞を受賞したのに文学者として読まれていません。地域の政治的な状況について知るための観察の対象として読んでいるのです。私たちのことを文学者として認識していない。そういうわけで『交戦』や『無の国の門』にはすごく需要があつたのです。

ところが私の小説には、それほど必要はありません。たとえば『歩く女』(二〇一七年)¹⁷は仏語や伊語に訳され、英訳もまもなく出版されますが、三、四カ国語であり、戦争について私が書いた作品のように二十カ国語にまでは達しません。私自身もそれがメディア受けし、市場に乗るのは分かっています。とはいえ、私たちが作家や芸術家という特性を奪い、活動家や特派員といった存在にのみ変えてしまうのです。

岡崎 小説をめぐる市場の問題は深刻です。サマルさんの小説も日本語に訳されるべきだとは思いますが。とはいえ、サマルさんは『無の国の門』の後、『歩く女』で小説家に再度戻りました。自分の職業(専門性)を維持したいと望まれていたのでしょうか。

17 『歩く女』は、ダマスカス郊外東グータで包囲下に生きる一人の女性が、歩き出したら止まれないという奇妙な特性のために、戦争の過酷な現実巻き込まれていく物語。

サマル いいえ、「職業を維持したい」という動機とは違います。むしろ、この表現をご存知か知りませんが、亡命者となった「七つ目の世界」（異郷と疎外の果て）から脱出したいと望んでいたのです。私は記録を書くときにはいつも自分自身に疎外感を感じていました。私の人間としての真の特性は、小説家ということです。真の自分に戻っただけです。書くことは職業というわけではありません。むしろ空気と同じく「存在している何か」です。小説を書かなかったことで、本当に辛かったのです。ですから小説に戻ったのです。もちろん、支援活動や記録については継続していきますが、現在は二つの小説を準備しており、来年に出版される予定です。つまり小説に、自分という存在に戻っているのであって、職業に戻っているわけではないのです。

私は小説家以上でも以下でもありません。『歩く女』は、これまでと比べて最も出来の良い作品と思っています。この作品で私は隠喩を用いることに心を砕きました。レースを編むように常に細部にまで気を配りました。化学兵器による虐殺についても、暴力的な単語をまったく使いませんでした。戦争や暴力に立ち向かう想像の力について語ろうと試みたのです。小説家として言えるのは、私は亡命の地にいますが、小説を再び書き始めた今、もう私は亡命の身にあるとは感じていません。というのも、小説とその言葉は私の「場」であり、祖国であり、言葉です。マフムード・ダルウィーシュは「わたしたとはわたしの言葉だ」と言います¹⁸。私はこの意見に同意します。

岡崎 フランスに亡命してからどれくらいになりますか。

サマル 九年ですね。でもいつもフランスにいるわけではありません。仕事で各地を回っていますから。

岡崎 異郷の地で執筆することに困難は感じますでしょうか。シリア国内で経験したことをシリア国内で書く場合との違いはあるとは思いますが。

サマル もちろんです。それは、『十九人の女たち』のように証言を集めて記憶について書くプロジェクトを始めた理由の一つです。というのも、私は自国の中にいないからです。それは根本的な大問題です。ですから、「私たちはシリアに帰らなければならない」といつも言っています。自分の頭にあるシリアは、現在の形のシリアではありません。まったく別のシリアになってしまいました。いずれにせよ、記録という作業は困難を極めています。

小説を書く場合には問題ありません。私はシリアに四十年間住んでいました。場所に対する記憶は確かです。しかし、政治や市民社会に関わる取り組み、記録活動に関しては大きな困難を抱えています。シリアから出るということ自体が問題です。シリアは文化であれ、医療であれ、教育であれ、たくさんのエネルギーを枯渇させました。もしシリアが一つの国となれば、シリアに帰ると心に決めています。もちろんアサド政権が存続する限り、帰ることはできません。今後、私にとって「欠如」は、シリアの外に在ることとなるでしょう。

岡崎 別の話題についても聞かせてください。『交戦』の中で「私はアラウイー派の女性だ」などと宣言し、宗派の意識を直接的に表明されています。革命前の小説でこのように直接的に書かれたことはないと思います。

18 パレスチナ人詩人、マフムード・ダルウイーシュの長編詩「ムアッラカート（古代抒情詩）のための韻」の一節。

サマル 革命前にそのように書いたことはないです。ですが、革命後には自分に起きた事について語っただけなのです。単に自身の経験について書いたのです。社会に宗派主義が存在するのに、誰もそれについて語りたがらなかった。でも革命が始まると、爆発的に語られるようになりました。私は語られることに反対ではありません。社会の問題を解決するためには、語らなければなりません。シリア社会に宗派主義が存在しないというのは事実ではありません。宗派主義はあります。私自身や私たちに起きた事について書いたのは、シリア社会を悩ましている問題について語るべきだからです。自分が宗教的に分類される存在とは思っていませんし、それに反対しています。宗教を信奉しているわけではないのです。

岡崎 パリでは誰もカトリック教徒ですかなどと聞きませんからね。

サマル 私が著書を出版し、フランスのメディアで注目されるようになってから困ったことが起きました。著者の紹介欄などで「アラウィー派」などと書かれるとは思っていませんでした。その後数年して、紹介欄には「シリア人」と書いてくれという条件を契約の中に盛り込みました。欧米社会には、宗教的アイデンティティでアラブの人々を区別することに惹きつけられる傾向があります。フランスに来て最初の一年、二年の頃は全く気づいていませんでした。シリアで起こっていることに忙殺されていましたから。フランスのメディアも追っていませんでした。その後、気づいたのです。ですから、いかなるインタビューにおいても「私に対して宗教的・宗派的帰属を記すのであれば、拒否します」という条件をつけたのです。ですが、メディアは宗教・宗派的帰属を強調したいのです。

岡崎 それは深刻な問題ですね。サマルさんは自分に起こったことをそのまま書いただけなのに、それが著書となって各国語に訳されて広まったとき、世界は別の文脈に読み替えて読んでいるわけですし、意味を変え、ある面のみを誇張しているのですから。例えば「アサド一族と同じ宗派の出身」ということをやたらと強調し、文脈をすり替えてしまいますね。

サマル いつもそうです。シリア社会の性質に対する無理解ともつながっています。アサド政権は国外に対しては「自分たちは世俗的な体制だ」、「アラウイー派がそれを担っている」とアピールするのです。実態はもっと複雑です。アサド体制は完全に世俗的でもなければ、アラウイー派だけで成り立っているわけでもありません。そこがよくある誤解のポイントです。

宗教・宗派的帰属が強調されながら作品が成功を収めれば、いろんな噂がたちます。好意的な評判もあれば、悪評もたくさんあります。私の作品に関しては、こういう問題が実際に起ったのです。

いずれにせよ私は自ら戦線に足を運び、シリアで何が起きたのかを書いた唯一の作家だと言えます。残念ながら、ですけれども。多くの作家が革命に加わり、論考を書いてきましたが、私は実際の現場に向かったのです。現場で団体を設立し、同時に執筆を続け、世界のジャーナリズムで伝え続けました。これが著書になったのです。

二〇一二年から二〇一六年にかけてとにかく止まることなく走り続けました。ジャーナリズムであれ、講演であれ、著作の執筆であれ、現場に関わる取り組みであれです。ほとんど狂っていたと思います。もともと働かなければと信じ続けました。罪の意識を軽減するためでもありました。二〇一三年にISが侵入してからというもの、私がシリア北部に再度入ることはできず、罪の意識にさいなまれたのです。シリア国

内で人々が死んでいるのに、自分たちはのうのうと生きている。ですから狂気にとりつかれたように、メディアや知的活動、執筆活動を積み重ねました。実際に著書は成功を収めました。『無の国の門』が二十カ国語に訳されたことに誇りを持っています。

岡崎 「ヌスラ戦線」などイスラーム主義者とのインタビューも著書で描かれていますが、怖かったですか。

サマル とても怖かったです。本当に怖かったです。とはいえ、シリア国内にいると自分への信頼が増します。自分の国にしていると感じて、幸福感に浸れます。歴史的な仕事に、真実に、公正に関わることであれば、恐怖心は和らいでいきます。とはいえ、本当に、本当に、怖かったです。特にイスラーム主義勢力指導者の一人にインタビューして、来る国家の形式や今後の目標について尋ねたときに、「アラウイー派を皆焼き殺す!!!」と言われました(笑)。黙るしかなかったのです(笑)。

岡崎 方言を変えたりしたのですか。ダマスカス方言をわざと使ったりしたのでしょうか。

サマル 私の方言はいろいろ混ざっています。とにかく現場では怖くて怖くて仕方なかったです。爆撃なども含めてすべてに対してです。

岡崎 恐怖心に苛まれ、爆撃にさらされる中でも、女性たちが家の中をきれいに掃除し、整頓して、尊厳を維持していたことをみてきたわけですね。

サマル ももちろんです。シリア国内と国外を行き来しながらそれを伝えたかったのです。爆撃や死に直面する中でも、シリア人は尊厳を維持し、気高く生きようと、訪問者を温かく迎えてくれました。女性たちは「生を創り出そう」としていました。砲弾が落ちて家が破壊されても、掃除や片付けを怠らず、もう一度家を建てようとするのです。食事を持つてきて、子供を教育するのです。死を目の前にしながらも、生を創り出す莫大なエネルギーを示すのです。これに私は驚愕し、本当に強い力をもらいました。

朝起きると、母親たちは息子が清潔にしているか、娘が身綺麗にしているか、自分も小綺麗かどうか気にしていました。砲弾が飛び交っている状況下にもかかわらず！食べ物も飲み物もそれほどありません。しかし、驚くほどに生活を整えようとするのです。私は「生の創造」と名付けました。自分にとってはこれがシリア人の性質なのです。生のデイトールにこだわり、生きることを愛する人々です。尊厳を持つて、人に与えようとする人々。ですから私は戦争の最中に置かれた人々のデイトールを伝えたいと思ったのです。死ぬだけではありません。生を創り出すのです。イスラーム主義勢力が女性を追放し、外出を禁じようとも、それに全く従わない女性たちが存在するのです。子供を育て、働き、未亡人も家の掃除をし、生を創り出すのです。武装勢力は武器を持ち、アサド政権は爆撃し、イスラーム主義勢力は新しい支配を強いているにもかかわらず、こうしたすべての状況の真つ中で、女性たちが生を創造しているのです。これが私に大きな力を与えてくれたのです。

岡崎 それは『無の国の門』の中心的な主題ですね。『歩く女』では初めてクルアーン（コーラン）の引用がありました。

サマル イスラーム主義勢力に殺されないようにね（冗談）。

岡崎 マフムード・ダルウィーシュも晩年の作品で、クルアーンへの驚嘆を詩の中で表現しています。空爆の中で死生観を問い直すような経験も踏まえて、『歩く女』でも新しい表現を試みたのでしょうか。

サマル 私は、クルアーンはアラビア語の豊かさの源だと思っています。それ以上に重要な源はないと思っています。クルアーンは常に書齋にあります。旧約聖書も新約聖書もあります。天啓宗教の三つの聖典です。クルアーンには並外れた言語の豊かさがあります。クルアーンはよく読んでいます。特に最近は、自分の言葉を磨くためによく読んでいます。中世の言語学者イブン・シーダの著作なども置いています。クルアーンは自分の読んだ中で最も美しい言葉で書かれています。それ以上のものはありません。

宗教やイスラーム主義についてではなく、アラビア語についてそう言いたいのです。修辭や語彙の豊富さに驚嘆しています。小説の中でクルアーンの章句を用いたのは、地域の遺産の一部だからです。クルアーンは物語です。クルアーンは歴史です。クルアーンを問題視していません。諸宗教を、宗教と政治を混同することを問題視しているのです。宗教は人間への呼びかけであり、政治は政治の領域で行うべきです。政治と宗教は分けて欲しいのです。ですから、クルアーンを深く愛しているのです。（イスラーム恐怖症に囚われた人のように）異質な人々を恐れながらクルアーンを見ていくわけではないのです。書かれていることを理解しなければならぬし、宗教と政治を分けるために必要なことを知るべきだし、シリアにおける原理原則をイスラーム法の名の下で歪めるためにクルアーンを利用することを許してはならないのです。クルアーンは言語として非常に大きい存在であり、いつも書齋に置いています。

岡崎 本日は素晴らしい対談となり、本当にありがとうございました。

サマル こちらこそ、どうもありがとうございました。

4 シンポジウム

4-1 発表 柳谷 あゆみ（東洋文庫研究員）



まず今回、このブック・ローンチにご参加くださっている方の中には、これからの本を読むという方も少なからずいらっしゃるんじゃないかと思えます。そこで一応、訳者としては、簡単にもう一度、サマル・ヤズベクさんの略歴と、『無の国の門』という本の構成について紹介させていただいて、それから、私が翻訳の過程で感じたことを少し述べたいと思っています。

最初に著者のサマル・ヤズベクさんについてです。作家であり、ジャーナリストとしても活躍されているほか、女性支援のためのNPO団体を設立した、社会活動家としての顔も持っています。このヤズベクさんの「行動する作家」という側面は、本書の執筆とも深く関わっています。それから本書を理解する上で、ヤズベクさんの出自の話、どのような出身なのかという話は必要かと思えますので、ここで改めて説明いたします。

シリアでは、どの信仰、宗教、宗派に所属するかは、個人が意識的に、さらに明確に変えない限りは、生まれ育った地縁や血縁、つまりどのような家庭に生まれたかでいたい決まっています。つまり所属する宗派は、所属するコミュニティとほぼイコールということになります。ヤズベクさんはシリア西部のラタキア県、そしてアラウイー派のイスラーム教徒家庭の出身です。この出自は、シリアのバツシャル・アサド大統領の一族と共通しています。大統領と共通する出自を持つている。別に家族だというわけではないんですけれど、この点は、彼女自身の活動に影を落としていくことになります。

というのは、出自の上では共通性がありますが、ヤズベクさん自身は、二〇一一年から始まった反体制運動「シリア革命」に参加し、一貫して反体制・反アサドの立場を取ってきたからです。そのため二〇一一年の夏にはシリアを脱出せざるを得なくなっています。現在はパリ在住です。

それで、ヤズベクさんは出国の翌年、二〇一二年に密入国の形で三度シリアに帰国しているのですが、そのときのシリアの状況を記録したのがこの『無の国の門——引き裂かれた祖国シリアへの旅』という本です。原書は二〇一五年に刊行されています。アラビア語の原題は *Bawābit arḍ al-'adn* といいます。『無の国の門』というタイトルはこの原題の直訳です。

本書は二〇一二年に発表された前作『交戦』（『十字砲火』と訳されることもあります）の続編的な作品と位置付けることができます。『交戦』は二〇一一年の日記を基に書かれましたが、『無の国の門』の方の対象期間は二〇一二年の八月から二〇一三年の八月までのほぼ一年間です。帰国した時期ごとに、時系列に沿って「一度目の門」「二度目の門」「三度目の門」と題した三部構成を取り、最後に後日談となる追記が付され



『無の国の門』
アラビア語原著



シリア略図

そこで、この帰国の際に彼女がどこで何を経験していたかという、本書における状況と構成をもう少し細かく見ていきたいと思えます。まずヤズベクさんの滞在地、それから、そのとき彼女が出会った人たち、どういう人たちがいたかというのを大まかに説明していきます。

彼女は解放地域であるシリア北西部のイドリブ県のサラークィブという町に滞在し、そこを拠点として活動していました（三度目の帰国の際には、サラークィブにいられなくなり、カファル・ナブルという別の町にも移動しています）。そして、サラークィブの支援者一族の家を拠点としていたわけですけど、このイドリブ県は、そもそもラタキア県出身のヤズベクさんとは、全く地縁のないところですよ。ではどうしてこういう支援者一族がいるのか、私も最初は少し不思議に思ったのですが、ヤズベクさんの活動は、非暴力の反体制活動として始まった「シリア革命」の延長線上にあります。「自由と公正」を理想に掲げたこの運動への共感と理解が解放地域の人々には生き続けており、これが支援者たちの協力の根源にあつたことが分かります。

イドリブ県は「解放地域」ではありませんが、アサド政権の支配を脱しているのは、陸上での話にすぎませ

ています。記述の対象となった地域は、主にシリア北西部のイドリブ県です。ここは反体制派の活動家たちの武装闘争の結果、アサド政権の支配を脱した「解放地域」と呼ばれる地域にあたります。

さて、このときの彼女の帰国は本書の執筆のためではありませんでした。彼女は女性の知的・経済的能力向上と、子どもの教育を支援する機関の設立準備のために帰国したのです。本書に記された語りや、語りの記録というものを明確に意識したのは「三度目の門」と題されている、三度目の帰国以降ということになります。

ん。制空権自体はアサド政権側にあります。その結果、この地域に対する空爆が激化し、民間人の被害もどんどん拡大していった、(国外に脱出する人もいるわけですが) 国内避難民が増加していきました。支援者一族以外で、彼女が出会った人々にはまずこのような国内避難民がいます。

また、「解放地域」で武装してアサド政権に対して立ち上がっている人たちもいます。反体制武装勢力は、一般的には自由シリア軍と称しています。もちろん他の呼称を持つ軍もありますし、自由シリア軍自体も細かくさらに区分され、それぞれの大隊名があります。実は「自由シリア軍」というのは、それぞれの武装勢力の自称にすぎません。自由シリア軍という統一された指揮体系を持つ組織があるのではないのです。こうした、組織としてのまとまりのなさが、後に自由シリア軍と称する人々の衰退の一因となっていきました。そして本書にもその過程は描かれています。二〇一三年以降、過激なイスラーム主義やジハード主義を採る武装勢力が、徐々に勢力を拡大していくことになります。

さらに解放地域でヤズベクさんが出会った人々の中には、ヤズベクさんと同じように武装せず、広報や教育を通した社会改革を志向する市民活動家もいます。

ヤズベクさんはこれらの人たちの語りを聞き取り、記録をしていきました。政権軍からの離反兵や、イスラーム主義の武装勢力の司令官の語りまで彼女は聴取しています。さまざまな人たちがいますけれども、全員「解放地域にいるシリア人(外国人ではない)」という点では共通しています。

また本書には、空爆の激化やイスラーム主義の武装勢力・外国人の武装勢力の伸長によって、解放地域と呼ばれた地域がどんどん変容していったことも記録されています。「シリア革命」として始まっていたものが、当初の主体であった人々の手を離れていく。非武装の人間が後退して、武装闘争が主体になっていく。さらに外国勢力が入ってくる。イスラーム主義者が入ってくるというふうに、どんどん社会も活動も変質し

ていく様を、彼女は目撃することになります。

それと同時に、イドリブ県においては地縁も血縁も持たず、さらに女性であり、政権側と見なされるアラウィー派の出自を持つ著者は、次第に自立的な生活すら難しいという状況に追い詰められていきます。そして最終的には、シリアでの活動を断念し出国することになるのです。

本書は、人々の語りを聞き取った著者がそれを語り継ぐ、さらに、時にはこの著者のことを語ろうとする少女が現れるというふうな、たくさんの語りが重なっていく構造をとっています。これらの語りはもちろん本書の重要な部分を占めています。

ですが、最初に言いましたけれども、本来この帰国は、語りを聞き取るためではなかった。彼女は支援活動のために戻ってきたわけです。

ではなぜ、これを聞き取り、記録しようとしたか。そのきっかけが、第一部にごく短く記されています。

彼らの力はどこからあふれてくるのだろうか。私たちのうちで生きる意味がわからないのは誰なのか。生きる本質から一番近いところにいるのは誰なのだろうか。(一二二頁)

まず、生と死を巡る根本的な疑問です。自分たち、つまり、この取材したヤズベクさん自身と全く違うところのない、ごく一般の人々が、なぜ武装して命を賭するまでになってしまったのか。市民国家を志向すると言いながら武装するという決断には、大きな矛盾が存在します。どちらのほうが生きる本質に一番近いのだろうか、その生と死を巡る疑問が一つ。

さらにもう一つは、この現状の本質に対する疑問かと思えます。この生と死を巡る疑問というのは、自分

たちの現状に対する認識というものにも結び付いていきます。内戦状態ともいえるような、その現況をどのように捉えるべきか。そういう問題です。例えば、

彼（引用者注 語り手の一人）は、今はこの先二十年続く宗派間闘争の過程にあり、アサド一族は決して敗れないだろうとみている。敗者となるのはアラウィー派の人びとだ。（二六〇頁）

このように解放地域の人々の中には、これをアサド大統領の宗派であるアラウィー派對スンナ派といったような、宗派間の闘争であるという人が少なくはないんですけども、そういう人でさえ、目の前にいるアラウィー派のヤズベクさんを個人としては尊重する、そういう矛盾した態度を取るということも記されています。

ここで視点を転じて、ヤズベクさんに語った人々について、その語りにとどのような意義があったかに触れておきたいと思います。語りを展開した人々は、先ほども挙げましたように、離反兵であったり、国内避難民であったり、あるいはイスラーム主義の武装勢力の司令官であったりとさまざまです。また、語りの内容も自分が現状をどういうふうに考えているのかという、自らについての語りなので、多岐にわたっています。ただ、彼らの語りの中には、自分のことを語っていくことで、自らを確認する。そしてヤズベクさんがもう一回、外に向かつて語ってくれる。彼女を通して外の世界に伝えていくことで、その存在を表明していくという意義が見いだされます。

「これで十分。今、私たちが死んでも、世界中が私たちの物語を知るのよね。そうでしょ？」（六〇頁）

これは国内避難民の少女の言葉ですが、語りを通して自らを外に伝えていくことに、大きな意義を見いだしていることが見て取れます。

今ここで、少女の言葉を挙げましたけれども、本書には何人もの女性が登場します。いろんな人の語りを取っていくわけですが、ここでの女性の描かれ方には著者サマル・ヤズベクの明確な志向が見られると思います。

「私たちは結婚をして子どもを産んで、自分たちの人生を築きたい。死に屈するなんて嫌なの」（引用者注 イドリブに住む女性の発言。二〇六頁）

本書に記録された女性たちは、現状を生き延びて、そして未来へ向かおうとするポジティブな存在と言えます。本書に記録された女性たちは、現状を生き延びて、そして未来へ向かおうとするポジティブな存在と言えます。少なくとも、積極的に死に向かおうとする、そういう存在ではありません。このような女性たちへの、その共感と賛美の姿勢というのが本書には一貫して見られます。これは著者であるサマル・ヤズベクの特性といえると思います。

さて、本書は三部構成を取っていますが、第三部が特に長いというアンバランスな構造になっています。私が訳しているときに、正直なところ、第一部、第二部の時点では、この著者の意図と状況というのが非常に分かりにくくて、第三部を通して読んでいって、ようやくそういうことだったのかと、第一部と第二部の訳をかなり修正したということがありました。もちろん私自身の理解力の問題もあるんですけど、このことの大きな理由は、著者サマル・ヤズベク自身が、自分の心情表現以外、自分自身の具体的な説明というのを、最低限にとどめたためではないかというふうに思っています。先ほどから何回か言っていますように、帰国の目的であった支援事業——彼女は帰国している間、その事業をずっと進めていたはずなんですけれど

も——これについても、あまり具体的な情報が出てこない。詳細には語られなくて、ただ成り行きを見てみると、順調にはいかなかったということだけが読み取れる程度です。

一人だけ語り部を演じる架空の人間がいる。私だ。(九頁)

本書は、語り手たちの雄弁さに対して、著者が後退しているといえますか、架空の人間であると言いつつ、徹底的に実物としての自分を打ち消していくような、そういう奇妙な手法が取られています。この手法については、実物としての自分を省いていくことで、現状を明瞭に表したいという意図もあつたかと思いますが、私自身の、これは読者として——翻訳するというのはやはり、読むことだと思うので——読者としての感想なんです。内戦の激化と、それから社会の変質によって失われていく、無に向かつていくこの祖国において、自分が根付いていくべき土壌を失った、彼女の自失の嘆きと戸惑いがあつたからではないかと思いました。

新たな占領を受け、もはや解放地域ではなくなつた。シリアの地でもなくなつた。シリアの革命の夢は盗み取られた。(二七六頁)

私が現実のなかにいない。(二八三頁)

「自由と公正」を理想として立ち上がった彼女が、宗派や性差の問題や暴力が蔓延する事態に追われ、(自立した個人としての)祖国残留を諦める過程からは、彼女自身が(失われてしまった)ありうべきシリアの象徴であつたかのような印象を受けます。私からは以上です。

4-2 コメント1

岡真理（京都大学教授）



サマル・ヤズベクさんの『無の国の門』という文学作品について、私は「ヘテロトピア¹⁹としての解放区」という観点からお話したいと思います。

何か、それを言い表す言葉が存在しなかったところに、ある言葉が作り出されて、それと名指されることによつて、それがそれとして輪郭を与えられ、対象化され、問題として語ることが可能になる、ということがあります。例えば、ガヤトリ・スピヴァク²⁰の意味での「サバルタン」という言葉、あるいは占領下パレスチナの状況を表す「スペイシオサイド（空間の扼殺）²¹」や、ナクバ以来、七十年以上に及ぶパレスチナ人の歴史的な生²²の状況を表す「漸進的ジェノサイド」というような言葉。それらの言葉は、私たちに新しい思考、新しい分析、そして新しい理解の地平を切り開くことを可能にしてくれます。

その一方で、出来事の本質を覆い隠してしまう言葉があります。先ほどの言葉とは、全く逆の働きをして

19 ヘテロトピアは、この世には存在しない場所であるユートピアに対して、現実に存在するが日常からかけ離れた他なる場所・異所を指すフランスの哲学者フーコーの用語。

20 ガヤトリ・スピヴァク（一九四二年〜） インド出身の比較文学者。コロンビア大学教授。主著『サバルタンは語る』が『生きるか』みすず書房、一九九八年。

21 パレスチナ系の社会学者サリ・ハナフィ（Sari Hanafi） ベイルート・アメリカン大学教授の用語。
22 イスラエル人歴史家イラン・パペ（Ilan Pappé） エクセター大学教授の用語。

しまう言葉。つまり、ある言葉で名付けられることで、むしろ思考がそこで停止し、真実が覆い隠されてしまうような言葉です。例えば、シリアに関して言えば、「内戦」という言葉がそれに当たるのではないかと
思っています。二〇一一年以来、シリアで起きている出来事は一般に日本では「内戦」という言葉で呼ばれ、語られていきます。アサド政権の政府軍体制派と、反体制派である反政府軍との間の戦争ですから、それは確かに内戦では、ある。間違いではないけれども、しかし、シリアで起きている出来事が「シリア内戦」と呼ばれて了解されてしまうことで、実はその出来事が本当は一体何なのか、私たちが知るべきものとは何なのかという、最も大切なことがすつぽりと抜け落ちてしまう、あるいは覆い隠されてしまうように思います。

サマル・ヤズベクさんの『無の国の門』という本は、シリア内戦がどのような内戦なのか、その内戦の下で人々がどのようにあつたのかという、単なるルポルタージュではありません。一般に「シリア内戦」と呼ばれて了解されてしまっているその出来事が、その本質において一体何なのか、何であつたのか、あるいは何であろうとしたのかということを伝えようとした作品であり、その点が理解されていないと、この出来事の本質も共有されないのではないかと思います。人口の半分が国内外に難民化して、四十万もの国民が殺された、そういう大量難民、大量死をもたらした悲劇としてしか、この出来事が世界に記憶されないならば、そのこと自体も、この出来事の悲劇の一つを構成することになるのではないのでしょうか。

日本からこの出来事を眺めている——私も含めて——多くの者たちにとつて、それは内戦であるのだけども、しかし、トルコの官憲の目をかいくぐつて故国に潜入したサマルさんとともに私たちが本書で出会ったのは、「革命」という言葉です。この「革命」という言葉に何が託され、何が懸けられていたのか。

日本の歴史の中で内戦に分類されるような戦争が必ずしもなかったわけではない。とはいえ、内戦という出来事自体は、大方のエスニック日本人には遠いものとしてあると思います。ましてや革命となると、私た

ちは自分たちの歴史の中に、にわかには参照するような出来事の記憶を持っていない。例えば、お国のためにとか、天皇陛下のためにかいって玉砕したりとか神風攻撃をしたりしたという記憶はあつても、しかし、私たちの子どもたちが生きる明日の社会のために、一人、二人の人間ではない、多くの者たちが立ち上がって命を懸けたという出来事の記憶が、広く市民的な記憶としては存在していないこの社会で、この本に書かれていることは、一体、どのような深部で理解されるのでしょうか。

それは革命であつた。非暴力で社会変革を求める革命が、政府軍の際限のない暴力によって、やむにやまれず武力に頼るものとなり、地上戦で政府に支配されていた土地を解放していつたけれども、やがて他国の介入を招き、宗教主義勢力が浸透するようになって、市民の国を求めたはずの革命、非暴力の革命が、いつしか宗派主義の政治に乗っ取られていく。革命が盗まれ、篡奪されていく。その悲劇を、知識として理解することができたとしても、そのこの意味、その悲劇の大きさとか痛みが、この社会でどこまで共有可能であるでしょうか。

例えば韓国の場合、三・一独立闘争、四月革命、そして、今から四十年前になりますが、一九八〇年五月の光州事件、そして一九八七年の六月革命²³。こうした歴史を持つ韓国社会でこの作品が読まれ理解されるのと、果たして同じ深みにおいて、私たちは——私自身も含めてですが——はたして本書を理解し得るのでしょうか。

「革命」と並んで、もう一つの鍵となる言葉が「解放区」です。先ほどの柳谷さんのお話にあつた解放地帯ですね。多くの日本人にとって「解放区」も、「革命」と同じように自分たちの歴史の中に参照項を持たない、ただの言葉、概念にすぎないのではないのでしょうか。例えば、韓国の人たちにとって、それは

23 三・一独立闘争は一九一九年に日本統治下の朝鮮で発生した独立運動。四月革命は一九六〇年に李承晩政権を打倒した民衆蜂起。六月革命は一九八七年に全斗煥政権から民主化措置の約束を引き出した民主化抗争。光州事件については第一部の注21を参照のこと。

一九八〇年五月、国軍による虐殺の前、つかの間、光州に出現した解放の時空間であつたという記憶がある。それがナショナルに分有されているからこそ、一九八七年六月、市民がソウルの、そしてあらゆる都市の路上を埋め尽くす、民主化抗争というものがあられるわけです。これによって、全斗煥大統領から直接、民主的な選挙実施の約束を引き出すことに成功し、今の民主化された韓国が実現されていくわけです。

エジプトもそうです。一八八二年のオラービー革命の記憶、一九一九年三月の——韓国の三・一独立闘争とまさに時を同じくしている——一九一九年革命の記憶。そして、一九五二年の革命の記憶があるからこそ、二〇一一年のあのタハリール広場の解放区があつたのではないかと思えます。²⁴ また、この「アラブの春」と呼ばれる一連のアラブ革命の先駆けとなつた、モロッコ占領下の西サハラで二〇一〇年一〇月に起きたサハラ・ウィー住民によるグデイム・イジーク抗議キャンプ村、²⁵ これも同様の文脈に位置付けることができるでしょう。

「解放区」という日本語の言葉から、私たちはあらゆる抑圧、暴力から解放された時空間を想像してしまいがちです。実際、西サハラにおける「解放区」というのは、占領国モロッコが、西サハラ解放を目指すポリサリオ戦線の戦闘員の被占領地への侵入を防ぐために、イスラエル軍に入れ知恵されて築いた巨大な砂の壁と、アルジェリアとモーリタニア国境の間に挟まれた西サハラのことで、こは、文字通りの意味での解放区、占領の暴力とは無縁の解放された自由空間となっております。しかしながら、革命で出現する解放区というのは、現体制に対する「否」という革命の意思を実現した空間ですから、革命それ自体の意志を粉碎するために、体制がすさまじい暴力で潰しかかります。つかの間、出現する、ほとんど全ての解放区が、その直後にすさまじい国家暴力によって、ある場合には自国政府によって、またある場合には植民地宗主国のあるいは占領国の軍隊によって弾圧され、蹂躪され、破壊されていく。しかし、その記憶は、記憶の地下水脈となつて流れ続け、やがて時を経て、再び間欠泉のように湧き上がるのだと思います。従つて、解放区と

は、今とは違う明日の世界の姿がつかの間、現実世界に出現したヘテロトピアであるとも言えるでしょう。

では、そうした解放区の歴史的記憶を持たないこの日本社会で、それはどのように受けとめられるのか。いや、むしろ、真に受けとめることに、私たちは失敗しているのではないかと思えてなりません。この春、『娘は戦場で生まれた』²⁶というドキュメンタリー映画が、日本でも公開されました。監督・制作は、ワアド・アルカティーブという若いジャーナリストのシリア人女性です。彼女は、シリア革命を通じて知り合った男性医師と、解放区であったアレツポで結婚し、やがて子どもが生まれ、「サマー（空）」と名付けられます。しかし、解放区であるアレツポは、『無の国の門』の舞台となる解放区同様、解放区であるがゆえに政府軍のすさまじい爆撃にさらされます。監督は、その爆撃の下での家族の生活、医療活動、そして空爆によって日々、犠牲になる市民の模様をビデオカメラに収めます。『娘は戦場で生まれた』（原題は、『Sama』）とは、そのような記録映画です。

先ほども言いましたように、革命における解放区というのは、暴力、攻撃、殺傷から解放された自由な空間ではなくて、えてして、むしろその真逆であり、シリア革命の場合、反体制派の解放区であるが故に、そこは政府軍からの最も苛烈な攻撃を集中的に見舞われる場所です。サマルさんの『無の国の門』でも描かれているように、政府軍は、解放軍の地上部隊にはかなわないので、空からおびただしい攻撃を仕掛けてくる。

24 オラービー革命は一八八一年から八二年にかけてエジプトで起きた民族運動。一九一九年革命はエジプトの対英独立運動。名目的独立を勝ち取る。一九五二年革命は王政を打倒し、エジプト共和国を成立させた政変。

25 グデイム・イジーク抗議キャンプ村 (Gdaim Izk protest camp) 一九七五年以来のモロッコによる西サハラ占領に抗議するため、二〇一〇年一〇月、占領下のグデイム・イジークに七千基ものテントが張られ、二万人が集結した。キャンプは一月、モロッコ軍の攻撃を受け、壊滅した。ポリサリオ戦線はモロッコからの西サハラ解放を求める政治組織。

26 映画『娘は戦場で生まれた』公式サイト <http://www.transformer.co.jp/m/forsama/>

だから、解放区は空爆・爆撃の最前線となります。樽爆弾²⁷というような惨たらしい殺傷兵器もそこから生まれてくる。アレツポも廃虚となり、市民もほとんど解放区を脱出して避難していく。でも、この映画の監督であるワアドさんもその夫もその友人たちも、アレツポにとどまり続けます。病院が爆撃されて、仲間の医師たちが次々に殺されていっても。それはなぜなのか。「裏切ることにはできないから」という言葉が作中、語られています。でも、なぜ、出て行くことが裏切りになるのか。誰を、何を、裏切ることになるのか。

私は、この映画を銀座の試写会で見たのですが、試写用の資料、そこにはナジーブさんもお書きになっていらつしやいましたが、ナジーブさん以外の日本人の書き手による解説には、「革命」という言葉も「解放区」という言葉も出てきません。この映画のタイトルの、『娘は戦場で生まれた』というタイトルが象徴していると思うのですが、確かに、監督の娘は、日常的に空爆にさらされ、空爆で傷ついた者たちがひっきりなしに運び込まれてくるアレツポの病院で生まれ、爆撃の音の中で生活しています。シリアで起きている出来事が「内戦」であるというのが、間違いではないように、監督の娘が戦場で生まれたというのも間違いではありません。でも、「内戦」という言葉を、シリアで起きている出来事に貼り付けてしまうと、シリアでの九年間起きている出来事のコア部分が見えなくなってしまうのと同じように、「戦場」という言葉をこの作品に貼り付けてしまうと、やはり同じことが起きるのではないかと思えます。

これは、昨日、インターネットで偶然、見つけたのですが、ある映画館でのアフタートークで監督さん自身がスカイプで出演して語っていたことが文字起こしされて、アップされていました。「シリア内戦」と書かれることが多いけれども、でも、「これは内戦ではありません。シリア革命と表現を変えていただきたい」と、監督さん自身が言っています。他方、これはネット上にある配給会社の宣伝文ですが、「いまだ解決を見ない未曾有の戦地シリア。その戦地にとどまって、そこで無差別空爆で無残にも失われていく命、祖国を愛する人々の悲

しみをカメラに収め続けた」、そういう作品だと。ここにも「革命」、「解放区」という言葉は出てきませんか。だとしたら、なぜ、監督夫婦は娘に「サマー」——アラビア語で「空」という意味です——と名づけたのか。それが映画を観ている者には伝わってきません。英語の原題は『For Sama』です。サマーのために。娘、サマーのためにこの映画は撮られた。娘に伝えたいから。でも、何を？ 娘の命を危険にさらしてまでも、母と父が娘と共にそこにとどまったのはなぜなのか。それは、この暴力の全てがなぜ起こっているのかということと本質的に結び付いています。父親がアレクポにとどまったのは、単に医師であつたから、ではない。治療を必要とする人々のために、医師の責務として危険な戦場に残ろうとしただけではありません。母親も、単に空爆で犠牲になる市民の生と死の姿を、ジャーナリストとして記録しなければという使命感だけで残っていたわけではありません。この『For Sama』(サマーのために)という作品に込められたメッセージ、母が娘に伝えたかつたメッセージとは、私は、サマルさんが本書を通して世界の読者に伝えたかつたメッセージと、同じものではないかと思えます。一点の濁りもない青く澄み渡つた空、まさにワアド監督が娘に名付けたそのSama、それは、そこにとどまることを選び、闘い、そして、革命で命を落とした者たちが見つめていた澄み切つた空、すなわち、明日のあるべきシリアの社会の姿のメタファーです。政府軍が樽爆弾によつて、あるいはミサイルによつて打ち砕こうとしたのは何だつたのか。政府軍の暴力性の本質とは何だつたのか。なぜ、これらの市民は立ち上がり、戦つたのか。なぜとどまったのか。なぜ命を懸けたのか。あるいは懸け得たのか。

27 樽爆弾 ドラム缶のような円筒形の容器に火薬や釘、金属片などを詰めた爆弾。シリア政府軍によつて反体制派支配地域の住宅街に投下され、多くの犠牲者を出す。

『無の国の門』は、決して、今、私が申し上げたことだけに収斂されるものではない、複数のテーマが、複雑に撚り合わさった作品ですが、著者サマルさんが解放区でこれらの語り部たちから受け取った言葉のバトン、そして彼女自身が語り部となつて、私たちに手渡そうとする言葉のバトン、「戦争」とか「内戦」とか「戦場」といった言葉で思考停止してしまつては、そうしたバトンを私たちがしつかりと受け取ることはできないのではないか。「革命」、「解放区」という言葉が、生と死の淵にあつた彼、彼女らの舌から発せられている、その生の極みにおいて、私たちがそれを理解するというのが必要なのではないかと考えています。

4-3 コメント2

ナジーブ・エルカッシュ(ジャーナリスト)

こんばんは。ジャーナリストのナジーブです。今日は二つの枠について話したいと思います。実は私、一昨日、東北から帰ってきました。この九年間、東日本大震災直後からずっと、東北取材しています。東北は精神的に私の国シリアの、ある意味で、代わりになつていると思います。自分の国が破壊されて、大きな悲劇に面しているときに、私は日本でゼいたくな生活を送っているという事に関して、やっぱり自然と罪悪感がありました。東北の被災地を、震災直後のニュースとしてだけではなく継続的に取材し、地域の様子を撮り続けてきました。おかしい話に聞こえるかもしれないんですけど、ずっと、東北に行くときに、いつもシリアのことを考えている。



実は、オンラインのこのブック・ローンチに参加させていただくことになって、この本を持って東北に取材しに行ってきたんです。悲劇の現場に行ったサマル・ヤズベクさんの記録と、自分の気持ちと、自分と現地の方がたとの接し方について、共通点と共通してないところ、正反対のところといろいろあります。私はたまたま、無理に共通点見つけようとする癖もあるかもしれないんですけど、それは自分の精神的な必要に応じてかもしれない。でも、本当に共通点はあると思います。

最初に私が話したいのは、日本における固定観念と、この『無の国の門』の理解と解釈です。日本における固定観念は、二つの固定観念があると思います。岡先生のお話にも、サマル・ヤズベクのビデオメッセージの中にも固定観念の話が出てきました。日本におけるシリア、アラブ、イスラーム文明に関する固定観念。そして、日本における日本への固定観念、自分たちへの固定観念。そしてもつと広くいうと、仏教文明の固定観念のことと、この本の理解と解釈について話したいと思いません。

私はこのイベントの中で、ジャーナリストとして話してくださいというふうに言われました。ジャーナリズムの話は、とても固定観念と関係の強い職業です。イメージ作りの職業ですから。私は、東北の方にシリアの話をする、すぐ固定観念的な反応出てくるんです。シリアの人にも、日本の話とか東北の話をする、固定観念があります。

今回、私は岩手県大槌町に行ってきました。この写真の建物は大槌町に残っている最後の震災遺構です。この民宿あかぶという建物の上にはまゆりという最後の船が津波のときに乗ったという写真は非常に有名



大槌町の民宿あかぶ

で、皆さんも見たことあると思いますけれども、その後、船は解体されました。これは私が先週撮った写真です。今、残っている民宿あかぶを、市民が震災遺構として、無くなった船のレプリカを造って、震災の博物館として造りたいということで、はまゆり保存会というのを作って、九年間頑張ってきました。町も条例としては、東北で博物館を造るといいう話になったんですけども、先週、私はその町議会を取材しました。町議会の最後の熱い議論を三日間にわたって撮ってきました。その結果、あかぶの建物が解体されるという話になりました。²⁸

サマルさんのこの本の中には、作家が会った人について、「この人は市民国家を望んでいる」という説明がよくあるんです。たまたま、無理に言ってる感じがします。あまりにも唐突に、「この人をインタビュしました。ちなみに、この人は市民国家を望んでいる。市民国家を欲しています」と、作家が必死に言うんです。それはなぜかというところ、世界におけるアラブ・イスラーム文化への固定観念においては、アラブ人、イスラーム教徒は民主主義、市民国家を望んでない文化だと思われています。その文化は宗教的な文化であって、場合によっては中世的な思想を持っている。極端にいうと、野蛮な人たちだから、ずっと戦争やつてるのも仕方ない。その地域は、何千年もずっと争ってるから、宗教の戦いだからとか、そういう言葉を日本によく聞きますし、ヨーロッパでもそういう話、よく聞きます。

シリア人はそれに対してすごく敏感になっていて、私たちはそうじゃない、と。例えばこの作家の場合、シリアに入って、誰かが「私たちは原理主義者で宗教的な国家をつくりたいんじゃないんじやなくて、民主主義、



大槌町議会を取材するナジーブ氏

要は市民国家をつくりたい」という発言があると、彼女はもう、すぐ書いて、すぐこの本に入れたという、必死さがあつたとすごく感じました。

それはシリアとかアラブの春とか、アラブの民主化運動に関するユニークな現象です。例えば、東ヨーロッパで起きた民主化運動のときに、東ヨーロッパの人たちは民主主義に値しないという声はほとんどなかったと思います。アラブの春と同じ時代の、例えばベラルーシで起きている民主化運動に対しても、普通に独裁政権に対する民主化運動ですというふうに、世界がそういう民主化の活動を、連帯感を持ってサポートしています。香港のデモに関しても、決して香港人はテロリストとか——中国政府はそう言ったりするかもしれないですけども——香港人としては、世界に自分の問題を伝えたいときに、そうした余計な、肝心なところから外れるところをいちいち伝えなきゃいけないという問題はないんです。香港とか、ベラルーシとか、東ヨーロッパは普通に「民主化運動してます」と言ったら、日本人でもアメリカ人でも、なるほど、サポートしましょう。と。アラブ人が民主化運動すると、すごく複雑になつて、すごく固定観念が大きな役割を果たします。この人たちはイスラーム教だから、本当に民主主義が欲しいのかな。もし原理主義的な宗教の国家、宗教に基づいた中世的な国家をつくるんだったら、今のシリアの独裁制度でいいんじゃないかと。アラブ人の訳の分からない宗教の争いだから、私たちはノータッチ、みたいな態度が出てくるんです。例えば、アラブの社会は宗教の社会とか、砂漠の部族の社会だから、そういう現代的な社会じゃないから独特、というイメージがあります。

でも私が大槌町で見たのは、まさにかなり中途半端な、民主主義のラッピングだけされた、ものすごい遅

28 この経緯については、例えば以下の記事を参照のこと。 https://www.kahoku.co.jp/special/spe1062/20200820_02.html

れてる、部族社会みたいなパワー関係が機能している場面です。要は、法律とか民主主義とか人権とか、もちろんアラブの国に比べれば、遅れているという言葉を使うのはすこくためらいますし、日本社会にヨーロッパ社会みたいになつてほしいというわけじゃないんですけれども。ただ、三日間、その町議会の中の議論を見ると、あまりにも矛盾があつて。あまりにもこれは、民主主義の町議会に見えるんですけれども、本当は町長がやりたいことをやれてる、やりたい放題。この民宿を博物館にする条例がもう数年前から存在するのに、市民がサポートして、議会の中で採決された条例があるのに、とても強引なやり方でこの民宿の解体を決めました。それは一つの例にすぎないんですけれども。



「ひまわりおじさん」こと佐久間辰一さん

こちらの写真は、ひまわりプロジェクトです²⁹。この写真に写っている佐久間辰一さんはひまわりおじさんと言われている方で、絵本の主人公にもなっています。全国で五十万人くらい参加している、市民活動の大きなプロジェクトになっています。ひまわりプロジェクトについても、問題はあります。本当は、ひまわりは福島の土からセシウムという放射性物質を取るんですけれども、政府とか地域の政治家の都合によつて、もうその話は今、言わないんです。セシウムは取れないという話になりました。

言いたいのは、日本社会のアラブ社会に対する偉そうな態度です。日本は先進国、アラブは発展途上国という専門用語によつて、非常に勘違いしやすいです。ですから、まずは自分の社会の弱いところをちゃんと意識して、そしてアラブ社会はそんなに遅れてないということを意識して。要は、いま現在の固定観念では、日本のイメージは良過ぎて、アラ

ブのイメージは悪過ぎる。本当は、日本はそんなに進んでない、アラブはそんなに遅れてないということを意識しながら、この本を読んでいただきたいと思います。

次のポイントとして、悲劇に直面した社会と外来者、特にジャーナリストとの関係について話したいと思います。私の東北での経験と、シリアに入った作家サマル・ヤズベクの経験には、共通点がある。逆に、正反対のところもあると思います。

この写真で私は、はまゆり復元保存会で九年間頑張ってきた、会長の古館和子さんと写っています。この建物が壊されると決まっていたから、ここで話を長くうかがいました。実は、私だけがそれを許されたんです。私は遠くからはるばる来ているし、古館さんのもついろいろなことを正直に話せるということです。例えば、他のジャーナリストは町議会の中に集まって、古館さんは簡潔に、「残念だけど、伝承館が造られるよう、これからは話し合います」という、表面的な話で終わりましたが、私はこの建物の前で、話を伺わせていただきました。本当は他の日本のメディアも聞きたかったと思うので、「なんで断りましたか」と訊いたら、「話しても意味がない、話しても何も変わらない」というふうに言ってくれました。もちろん、私に話したら、何か変わるといふわけじゃないんですけども、私はアウトサイダーとして特別な扱いはされて。そして私も彼女と九年間の付き合いがありますので。彼女の意見を簡潔に言



古館和子さん



大槌新聞の菊池由貴子代表

この写真の女性は、自分で大槌新聞を独りで出しているんです。大槌とか東北の話を、みんな「もう興味ない」と言うなかで。実は私、驚いた話があつて、フランス国营テレビの日本人スタツプから最近、連絡が入つて、偉そうな感じで、「大槌の今の話とか、いろいろ案内してください、取材のネタとか教えてください」と言われたけど、もう完全に断つたそうです。私は、「なんでですか。あなたは必死に独りでこの新聞を出して、大槌町のことを伝えたいんじゃないですか」と訊いたんですけど、彼女はそのスタツプが、私にネタを教える義務があるよな態度で来たので、「嫌です」というふうに言ったのだそうです。そういう意味で、悲劇に面しているかたがたは、非常に敏感なんです。

うと、後の世代がこの建物を見て、しかもこの上に船のレプリカが乗っているのを見れば、本当にすごい津波だったということを一瞬で分かつてもらえます。伝承館の中で、石に刻んだ文字とか、写真とか映像とか見ても、ただの楽しい観光地みたいな感じになる。

なんで私と彼女が通じ合つたかについていうと、私も今、シリアに帰れないわけです。私の九一歳の認知症のお父さんとスカイプでよく話しますけれども、実際にお父さんに会つたと同じような感覚になるかといえ、全くならないんです。同じく、誰かが震災の写真を見ても、映像を見ても、この建物を見ることは全然違う話なんです。



ナジーブ氏の父

最後に、一つの例として、私は宮古市でハルさんという方に会って、大槌町の話をしました。私は勝手に理解しているような気になって、民宿には犠牲者が出てないから保存してもいいじゃないかと、すごい自信で言っただけですけども、また新しいことをハルさんに勉強させてもらいました。ハルさんはいまだに津波の写真を見れていません。見られないんです、十年たつても。この写真の中で彼女が持っているのは津波の記録の雑誌で、この黒いカバーについて私たちは長く話し合いました。たくさんの本とか雑誌が出てるんですけど、全部、カバーに被災の写真があるから、彼女は買えない、持てない、見たくない、見られない。たまに、当時の臭いとか、音とか、例えば津波のときにアラームがたくさん鳴りましたので、車のアラームが鳴ると、彼女は心臓がばくばくするというふうにおっしゃいました。この雑誌だけは、外には写真がないから持てます。私に向けて、中の写真を見せてくれたんですけど、自分は見なくて、私にだけ見せたという感じで。そして、このカバーのデザインについて、もしかしてデザインは現地の方かもしれないと話しました。見たくない方もいるかもしれないから、わざと黒いカバーにして、津波という文字だけ書いたのかもしれないんです。このように、現地のかたがたの気持ちは本当に、非常に複雑なのです。

私は今、大槌町の高校生たちとシリアの難民キャンプの高校生たちの、オンラインでの交流会をやろうと



宮古市のハルさん

しています。大槌町の場合は、二〇一一年三月一日の出来事をどうやって思い出すか、なんですけど、シリアの場合は九年間にわたって虐殺、空爆、被害が続いています。九年前に悲劇に面した人と、半年前に悲劇に直面したという流れは大きいから、このハルさんの精神的な状態を見ると、シリア人の子どもたちはどれぐらい大変なことになってるかということを考えます。

最後になりますが、この本には実は、日本と関係がある人物が出てきます。この写真の方はラード・ファリスといって、シリア民主化運動、シリアの独立メディアにおいて非常に大事な役割を果たしました。残念ながら日本のメディア以外、世界中のメディアで取り上げられませんでした。彼の町はカファル・ナブルといって、彼はそこでラジオ局も設立して、いろんな話を自由にしました。この本の中にはヤズベク氏が彼の所に行つて、長期間、滞在する記述があります。彼らが設立したメディアセンターは非常に活発で、彼らを作る横断幕は面白みがあり、嫌みとか、ブラックユーモアがあつて、世界に対して絶望を表しているとかいったような横断幕が、国際的に非常に話題になりました。彼は一回シリアを出て、ハーバードで講演したり、TEDトークもしています。実はこの方は、二〇一八年の一月に原理主義者たちに暗殺されました。暗殺される前の最後のインタビュは、日本のテレビ番組でした。私がコーディネートして、堀潤さんの番組に出ました。当時、彼の町に抑圧を加えていたのは原理主義者のヌスラ戦線などでしたが、彼がインタビュの中で何回も繰り返したのは、ヌスラ戦線も抑圧的な勢力だけでも、根本的な問題はアサド政権の独裁制度だということでした。その独裁制度が彼ら、原理主義者たちを産んだのです。



ラード・ファリス氏



東北の風景

作家はこの本の中で、シリアの政権が原理主義者たちのリーダーたちを刑務所から解放したということに触れていますので、ぜひそういうところに注目してください。シリア政府は、解放された地域の中で原理主義者たちの勢力が増すように努力しました。イスラーム国やヌスラ戦線が強くなることによつて、世界のメディアの注目が、そういう原理主義者たちにかきます。なぜかというところ、先ほど話した固定観念があるからです。固定観念があるから、日本人とかアメリカ人とかは、イスラーム国とかヌスラ戦線とか、誰かの頭を切つてるとか、そういう野蛮な行動を取り上げやすいです。なぜかというところ、もともとそういうイスラーム文明のイメージがあるからです。このライド・ファールリスさん、本当に非常に素晴らしい方で、この場を借りて、彼に改めて敬意を表したいと思います。

私は一昨日、東北から離れたときに——もちろん東北にはまた行けないわけではないんですけども——離れるとすごく寂しい気持ちになりますので、この写真を新幹線から撮りました。また、東北に行きたいと思います。

先ほど紹介したライド・ファールリスさんのように、シリア人は、悲劇に対してユーモアを使います。皆さんは、風の電話をご存じかもしれませんが。大槌町に存在する、心を癒やすための施設です。今年、映画にもなりました。³¹ どういうものかというところ、どこにもつながってない電話があつて、大切な人がたを亡くした人がこの電話ボックスに入つ

て、その電話を取って、大切な方と話す、想像の中で話すということです。私は何回も取材しました。その電話ボックスに実際に入って、「内戦」じゃないシリアに電話したかったんですけど、「内線」を知らなかった、というおやじギャグでお話を終わりにしたいと思います。ありがとうございます。

4-4 デイスカッション

山本 それでは、皆さんからいただいている質問を幾つか取り上げながら、議論をしていければと思います。たくさん質問をいただいているんですけども、やはり、この著者のヤズベクさんがアサド政権を支えている側のアラウィー派コミュニティーの出身でありながら、反政府の立場をとつていて、さらにイドリブのような反政府派の支配地域で支援活動等をしているというところで直面した困難さについて、具体的に話を聞きたいというご質問を幾つかいただいております。まずは柳谷さん、お願いします。

柳谷 はい。まず、作者ヤズベクさんがアラウィー派ということで、反体制派の拠点であるイドリブでの活動において具体的な困難や障害があったかについてです。これは本書の中では具体的には出てきません。むしろ、彼女自身の前では、現状をアラウィー派対スンナ派の宗派間闘争と考えているとはっきり言った人よりも、そうではないと主張した人のほうが多いのです。つまり、本当にそう思っている人もいると思うんですけども、彼女に対して非常に気を遣っていた、そういう記述のほうを多く見かけます。ただ実際には、彼女は語りを集める際に、いろんなポイントで自分が何者かを伏せなければならなかった。特に、イスラーム主義の武装勢力の司令官に会うときには、彼女は自分の身元をほぼ明かさず、つまりアラウィー派で

あるということを言わず、単に作家として集めているという、その情報しか出せないわけです。しかも、間に立つてくれた人間が、たびたび彼女がアラウィー派であるという出自に関して感情を出しそうになるときに、抑えてほしいというしぐさを示す。彼女もそれを理解して、自分を抑えています。尊重してくれる人がいることも彼女は実感しているわけですが、特にイスラーム主義・ジハード主義の武装勢力の中にあつては、自分が何者であるかが分かった途端に、それが命の危険に関わってくるということを常に感じていたといえると思います。こうした状況から、語りを集めるといいう上でも、彼女自身が自由に行動するという意味でも、彼女の出自というのは、非常に重く影を落としていたと思います。ですが、もつと具体的に活動の困難さ、障害の元になったのは、私が読んだ感想で言いますと、彼女が女性であるということ。「解放地域」が、いろいろな意味で、女性が一人で出歩けるところではなくなつてしまつた。それは大きいと思います。

アラウィー派であるのに、反アサドの立場に立つていることの困難についてもご質問いただいていますけれども、さきほどの話はこのことともつながっていると思います。反アサドであることがアラウィー派であることに直結しかねない状況というのも、他方では存在しているわけです。それに彼女は直面しなければならなかつた。ただ、彼女に対して協力的な人間は、そういうところを彼女に見せまいとする。もしくは、彼女がアラウィー派だと分かつた途端に、あなたのこと、あなたの一族のことも尊重するということふうに、言ってくる。そうした大きな矛盾とも直面しなければいけなかつたということがあるかと思ひます。

ナジーブ そうですね。非常に困難になつてきました。最初は民主化デモの中でうたわれるスローガンの中でも、「シリアは一つの国民だ。私たちはシリア人だ」というようなことで、デモのリーダーの中には女性

もいたり、アラウィー派の人もいたりしました。その後、解放された地域でイスラーム原理主義の武装勢力の影響力が増すにつれて、彼らの世界観が中心的になっていきました。その中で、例えば、九〇%の人が多様性を信じて、一〇%が他者を排除したいといっただけで、他者の状態は非常に危険な状態になりますよね。この作家もそういう、基本的にシリア社会の多様性を大事にしたい人々、共存を大事にしたいという仲間と一緒に入ったんですけれども、先ほど柳谷さんもおっしゃったように、矛盾がいつぱいありました。

例えば、本の最後の方で、本当に激しくアラウィー派を憎む方にインタビュウしています。その方は、もうはつきり、「これは宗派の戦争だ。スンナ派とアラウィー派が戦つて。あなたはいろんなきれいな言葉を使うかもしれないけど、もう、議論通らないぞ」みたいな感じの方と話しています。彼はラタキアという、アサドの出身地域で生きていたスンナ派の方で、非常に侮辱を受けて、アラウィー派に対して憎しみを持つている。インタビュウの中で彼は、一回、アラウィー派の村に入つて、まだ何人が残っていたアラウィー派の男たちを殺してしまつたというふうに言いました。でもその後すぐ、ダーイシュ、つまりIS関係の人たちが大砲を持ってきて、住民がまだ残っていたアラウィー派の村を爆撃しようとした時には、彼はその原理主義者たちを止めて、それで争いになつて、殴り合うことになつたと言いました。「私はアラウィー派を殺したい」と言つたすぐ後で、ISはアラウィー派の子どもも女性もいる村を爆撃しようとしたから全力で止めたという。すごい矛盾。シリア人の私から見ると、この人はいろいろあつて憎むようになったんですけれども、根本的にはやつぱり、国の一〇%であるアラウィー派を追いつくことはできないし、共存しなきゃいけないと、どこかで分かっているわけです。それだからといつて、アラウィー派の活動家が入つたら安全というわけではないです。

現実には、ダマスカスという首都は今、もう完全に政権の支配下にある。この紛争の前からずっと、アサ

ド政権を金銭的に支援したのは、ダマスカスのスンナ派の商人たちです。そういう暗黙の了解みたいな同盟関係があつて、アサド政権と軍、ダマスカスと、実はアレツポの商人たちとも非常に親密な関係があつて、アサド政権はそういう伝統的なスンナ派の商人の家族たちのビジネスをじやましない。その代わりにお金をもらうとか、そういうふうな賄賂とか、汚い関係がたくさんあります。シリアのアサド政権の根本的なサポーターの中に、スンナ派が入つてゐるわけです。ただしその、イドリブのような田舎にいる、武装勢力の人たちは、空爆してくる政府軍のほとんどの司令官がアラウィー派というイメージを持つていて、すごい憎しみが増してゐるんです。でも、最近のビデオを見ても、例えば空爆している飛行機が落ちて、そのパイロットが捕まったときに、その人はスンナ派だったりするんです、実際。なので、現実には複雑なんですけれども、単純化する人は海外だけじゃなくて、シリア人の中でも単純化して、「もうこれはアラウィー派對スンナ派の戦いだ」というふうに言つてゐる方はいます。

山本 今の話ともつながるんですけども、いわゆるニュース解説であるとか、あるいはアカデミックな解説だと、例えば何派はこうだとか、この地域は何派だからとか、そういう細部に入つていくことで、シリアの全体像がむしろ見えなくなるといふか、すごく分割された、分断されたシリア像みたいな感じで描かれることが多いと思うんだけど、サマルさんのこの本は、そういうことを乗り越えているように感じられる記述になつてゐるといふご意見がありました。

例えば、この本には地図が付いてないんですけども、そうすると、確かに分かりにくいところがある。でも逆にいうと、そういう地図のような詳細な情報というか、客観的な情報がないことによつて、その作者の目線に同化しながら、この現地にいる生身の人々と向き合つて、生の声に耳を傾けるといふ、そういう経

験を共有できるような気がするつていうようなご意見であつたり。

それから、この本で描かれているシリアの北西部は、非常に暴力のイメージが強いけれども、本の中には、例えばローマ遺跡の話であつたり、モザイクの博物館の話であつたり、アネモネの花が咲き乱れているとか、アーモンドやオリーブの木が茂つていたりといったような、風土であるとか、美しい歴史であるとか、そういうものも描かれていたりするところが、とても印象的だつたというご意見もありました。

要するに、今、シリアで起きている現実を描くこの本は、確かにジャーナリズムの目線もあるんですけど、やつぱり同時に、小説家であるサマルさんならではの書き方になつている。そこが、新聞報道のような、いわゆるジャーナリズムの仕事とは違う、文学という形で今のシリアが描かれているんじゃないかという事です。

この記録文学という形は、いわゆるジャーナリズムの仕事と、一体、どういうところに違いがあるのか。どういうアプローチの特色があるのか。それについてお話しただけですしょうか。

岡 最初にこの本を読んだとき、私はすごく分かりにくかつたです。先ほど山本さんが、例えば新聞報道とか、事細かに説明することによつて、逆に全体像が見えなくなつてしまうことがある、ということをおつしやつたんですけれども、でも例えば、ジャーナリズム、あるいは学術的なものもそうだと思うんですが、セクションで分けて説明していく、そうすることで、読んでいる方も頭の中が整理されてゆく。でもサマルさんは、そのような、何かを腑分けして、整理して、それぞれについて細かく解説するという書き方は敢えてしないで、一つの場面であつても、何か複数のものが撚り合わさつた形で描かれています。先ほど一部を朗読³²しながら、そのことを実感しました。

今回、朗読用に選んだのは、サマルさんのモノローグが一定程度続く部分です。客観的なことを描写しながら、文章と文章の間に、一文、内的なものが挟まっています。客観描写を積み重ねながら、その中に、自分の主観的なものを織り込んで、そうこうしながら複数の要素が絡まり合っていく。あえて分かりやすい書き方をしていないような気がするんです。これは、私自身があまりシリアのことに詳しくない、ということもあるのかもしれませんが、何か、単純に割り切って分かってしまうのではない書き方というのが、意図的に選択されているように思いました。

もう一つ、ナジーブさんは、本書には、「市民国家を目指している」という言葉がシリア人やアラブ人、あるいはムスリムに対して世界が抱いている固定観念に対する一種のリアクションとして過剰に書き込まれている、という印象を持たれたみたいですが、私自身はそのようなには思いませんでした。この本を読むと、非暴力で市民国家を目指す者たちの、市民革命として始まったものが、宗派主義に革命を盗まれていった、そして最後は、ジハード主義者のアミール（指導者）の、「アラウイーの女たちに居場所はない、異教徒は改宗しない限りシリアには居場所がない」という言葉に、かなり長いスペースを割いていますよね。革命が盗まれて、本来、その革命が始まったときに目指されていたものとはぜんぜん違うものに成り果ててしまった。まさに、虚無ですね、無になつてしまつたというような形で、文学的に再構築されていると思います。

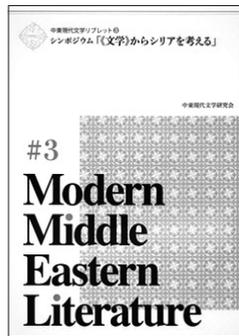
柳谷 サマル・ヤズベクの文章の特徴について、それから、なぜサマル・ヤズベクを選んで翻訳したのかに

32 当日の会では、作品の一部を岡真理氏が朗読したが、本記録ではその部分は割愛した。

ついても質問をいただいているのですが、これらの質問の答えはほぼ同じところにあるかと思えます。

まず、このサマル・ヤズベク『無の国の門』の翻訳は、最初、出版社の編集者の方に、これをどう思いますかと訊かれたところから始まってます。もう一つ、二〇一七年に行ったシンポジウム「文学からシリアを考える」³³の場で、岡崎弘樹さんもサマル・ヤズベクについて取り上げていて——このシンポジウムでは、この時期におけるシリアの作家の作品がかなりリストアップされていたかと思うんですけども——そこでも彼女の名前が印象に残ったというのもありました。ですが、薦められたからといってすぐに翻訳をするわけではなく、彼女の作品を選んだのは——私がよく文学というものを知っているかという問題は置いておきまして——やはり、これが記録という形を取りながらも文学であると思ったからです。ジャーナリズムと文学の違いは、私なりの考えで言うと、伝えたいと思っているもの、伝えようというのがジャーナリズムの本旨にあるかと思えます。何が起こっているのか、その問題は何かというのをかみ砕いて、それを伝える。文学の場合は、その中に作者の感性、何を感じて、自分が何をやっているかというのを一回、作者の思索の中で消化して、また放射していく過程がある。そういう、真つすぐ伝えるというのとは、明らかに違うベクトルが働く。私はそういう膨らみがあるものを、まず自分できちんと読んでみたいと思いました。

そこで、サマルさんの文章の特徴ですが、とても繊細で、語彙が非常に幅広い。いくら辞書を引いても、最後まで新しい言葉がどんどん出てくる。ものすごい単語量、語彙量で、そういう意味でも非常に豊かな世界を持っていると思いました。



冊子『文学からシリアを考える』

もう一つ、記録文学としても卓越した一作だと思いました。シリアについて、特に二〇一一年以降には書かれた方がたくさんいらつしやるんですけど、それを文学という形で表して、ここまでの厚さ、ここまでの長篇で、きちんと作り上げた方というのは、そんなに多くはないかと思っています。短篇集は多く出ています。インタビューを集めたものについても、多くの人の話を集めたというのはかなり出ているんですけども、それを自分の中で消化して、さらに自分を乗せて書く。それがさらにこの大分量になつて、立派に成立しているという意味では、サマル・ヤズベクは——最初は薦められて見てみたわけですけども——これは訳してよかつたなと思いました。

あと、女性だということのも大きいです。取り出せる情報が違つてきます。彼女の語り部の多くが女性であるということでも分かると思うんですけど、男性に対して、これらの女性がそこまできちんと話ができただかという問題があります。まずマンツーマンで話ができるかという、そういう違いもあるかと思ひます。特に未亡人の場合は、本書にもありますけれども、男性に待婚の期間中は会わないというイスラームの決まりに基づく伝統を守っている方もいらつしやいますから。そういう意味でも、非常に興味深い話が集められていると思つています。

山本 最後にナジーブさん、シリアで起きていることをどうやって伝えるかについていうことについてのナジーブさんの考えを、最後にまとめて聞かせていただけますか。先ほどの大槌町のお話も含めて、声を聞かれる

33 二〇一七年六月一七日に東京大学にて行われたシンポジウム「《文学》からシリアを考える——独裁、内戦、そして希望」。発表者の多くはこの二回のブック・ローンチのパネリストと重なる。

べき人たち、だけど、その声に耳を傾けてもらえない人たちっていうのが、シリアであれ、日本であれ、たくさんいるんだっていうことに対して、ナジブさんはどういうふうにその人たちの声を伝えていきたいのか。そういうナジブさんのジャーナリストとしての姿勢について、このサマルさんの仕事に対しての感想も含めて、お話いただけますか。

ナジブ 分かりました。先ほど、柳谷さんの話の最後にあつたように、確かにこの作家は怖い男性とも話ができる強い女性です。また、外国人戦闘員が入ってきて、シリアの習慣とは違う習慣を押し付けようとしたという話の部分で、もともとイドリブなどの田舎の女性たちは、農家の仕事をしているので、そもそもは強い、中心的な立場で、ちゃんと存在感も守られているというふうに言っています。

もう一つ、その流れですごく印象的だったのは、シリア人の女性も男性も、生活の清潔感を保とうとしていると、何回も言っている部分です。例えば、先ほど写真を見せたジャーナリストのラードさんが、メディアセンターでの食事の後、お茶のポットを何回も洗ってから戻すということまで書いてます。私は無理にいちいち、日本と比較したいわけじゃないんですけども、最近、麻生太郎さんが「民度の高い日本人」と話しました。アラブ世界の中では、シリア人はすごい自分たちは民度の高い民族だと思ってるんです。例えば、最近よく聞く話は、シリア人の難民がエジプトに入って、エジプトにはすごい長い歴史があるのに、料理は全然駄目だと。実は、私も直接、エジプト人に言われたんです。不思議なことに、「難民なのに、エジプトに来て、私たちに料理を教えてください」とか言うんです。この作家も、みんな花を植えているとか、きれいにしている、掃除してるとかいう話を書いています。

作家は今、パリに住んでいますけど、やっぱりシリア人がヨーロッパでいろんな差別される。それに対して

もやもやして、「おまえらヨーロッパ人は、あんまりお風呂入らないだろう」とか、パリに香水の文化があるのは、フランス人があまりシャワーを浴びないからとかつていう話、よくシリア人が言うんです。私たちはきれいだ。私たちは民度の高い民族だと。この作家は非常に絶望的な考えを持っている部分もありますけれども、あるところでは、やっぱりこれぐらいの規模の悲劇が、これまでの歴史の流れを決定的に断ち切るためには必要だという発言もしています。やっぱり作家は希望を持っています。この争いの後、この嵐の後、新しいシリアが生まれる、復活するという希望を持っていて、シリア人はそれに値する国民だと思っているわけです。

私は、一回、新橋駅前でおじいさんにインタビュして、日本の戦後の教育について教えてくださいと聞きました。そしたら、彼は私にすごくショックなことを言いました。おじいさんが言ったのは、「私たちは一九四五年の八月に、学校に行ったら、今日までは天皇陛下が神様、でも次の日、学校に行ったら、日本は平和主義ですと言われた」と。昨日まで私たち、「みんな国のために死ぬ、戦争は続く」と言われたと。そういう、この作家の言葉と同じように、これまでの歴史の流れを決定的に断ち切る瞬間が来たわけですけれども、それをもたらしたのはアメリカ人でしたね。日本人は当時まで天皇を神様だと思っていました。実は今、シリア内戦の中で、シリア軍の人が民主活動家を捕まえるときに、バツシャール・アサド大統領の写真を見せて、「これはおまえの神様だ」と言うんです。それは、日本であつたことと全く同じです、ですから、シリア人も同じ人間で、みんな自由と民主主義に値すると思っっています。

ジャーナリズムの仕事については、サマルさんの文学との境目にあるその作品はとて面白いと思います。あと、サマルさんは、本当は日本人じゃないかと思うぐらい、語り部の役割をちゃんとした形で果たそうとしています。大槌町とか東北に行くと、市役所も語り部という事業を置いているぐらい、日本には語り部とい

う、語る人がちゃんと整理した形である。そういう語り部というのはアラブ世界には全然なく、あんな九年間続いている悲劇で、数百万人の人生に直接に衝撃与えたのに、意外とちゃんとした語り部の役割果たしている人はいないんです。ですから、そういう意味で、この本は非常にユニークで、貴重で、とてもいい選択肢だと私は思います。

山本 ありがとうございます。最後の語り部については、私はアラブにも語り部はいると思っています。たくさん、無数の語り部が。特にアラブの方は、本当に一人一人、驚くほど語りが上手です。これは、パレスチナでもそうだし、シリアでもそうですし、難民になったかたがた、お年寄りのかたがた、子どもでも、本当に驚くほど人の心を引き付ける語りついでいうものにあふれている。ただ、それに誰が耳を傾けるのか。あるいは、それを誰が記録して世界に届けるのか。そういう存在ついでいうものが問われているのであつて、決して語っていないわけではないと思う。そういう、今まで耳を傾ける人がいなかった語りに耳を傾けて、そしてそれを書いて、世界に伝えようとする。そういうサマルさんの意気込みというか、責任感というものが、この本からは強く感じられると思います。

4-5 アフタートーク

山本 それでは、ご自由に皆さんの間で言い足りなかったことをお話しいただければと思いますので、岡さんから口火を切っていただけますか。

岡 酒井啓子さんが、「アラブとか中東とか第三世界に関する文学作品が文学として読まれない」というサマルさんの発言に反応して、翻訳者としてそれにどう応答するのか、という質問を寄せてくださいました。一つ例を挙げると、モフセン・マフマルバフ監督の『カンダハール』（二〇〇一年）という映画で、空から義足がパラシュートで降ってきました。すごく空想的なフィクション以外の何ものでもないんだけど、あの作品をアフガニスタンのドキュメンタリー映画だと思っただけの人、結構、いるんですね。文学作品を翻訳する人たちは基本的に、原著の文学性をいかにして日本語に置き換えるかということに、みな、心を砕いてると思うのですが、そうやって心砕いて文学作品を文学作品として翻訳しても、それが結局、文学とは別の次元で、単にその社会を知るための素材、情報として消費されてしまう。これも一種のオリエンタリズムだと思えます。だから多分、それは、単に翻訳という次元の話ではないか、という気がします。

柳谷 すみません。そういう話だったのか。私、一応、文章で回答したんですけど、めっちゃめっちゃ技術的なことを書いてしまつて。

岡 いや、もちろん、翻訳の問題でもあるわけです。いわゆる広義の詩的言語をどう外国語に翻訳するのかという。

柳谷 何ていうか、もちろん特に今のシリアのことについて書かれた記録文学となると、どうしても現実が大きすぎて、厳しすぎて、文学として味わう余地というものをどんどん圧倒していつてしまう。もちろんそ

れはあると思いますが、できれば自分が——できているかどうかはおいても——やはり目指したい部分というのは——事実を情報として読むのであれば、それは新聞で簡潔に言ってもらえればいいので——読み解くときに、リーダビリティというか、どれだけその言葉、文章というものが、一定のトーンを持つて入ってくるか、味わいと安定感だと思ふんです。自分が読むときもトーンが気持ちいい文章はやつぱり何回でも読みたくなりませし、頭に残りやすい。でもそのトーンは、翻訳する者としては、作者が放っているものから逸れてはいけません。だから、翻訳者としては、私はまだ発展途上なんですけれども、工夫する余地があるとすれば、文章のトーンを丁寧に整えていくことだと思つています。オーケストラの指揮者みたいな感じでしょうか、作曲者が出しているものを消化した上で、どういふふうに整えて、自分なりに作者の意図から外れない範囲で再構成して出していくか。さらにそれが読み手に対して、何というか、感動みたいな大きなものじゃないかもしれないんですけど、そこが気持ちいいとか、逆に気持ち悪いとか、そういうふうに通きかけていくものを、文章として作っていくことが大事かなと思つています。

ただ本当に、何度も言うように、現実が大き過ぎると、そういう細かいというか、ある意味繊細な作業かもしれないんですが、その繊細さというものが全部、現実につぶされてしまう。そこどうやって戦うかということ、今回、こういう厳しい文章を訳して思いました。

山本 会の冒頭に流したサマルさんのインタビューがすごく良かったんですけど、それを聞いていて、作家としてシリアのことを書くつていうのは、生の美学、生きることの美学を表現するつていうところに、普通のジャーナリストの仕事との違いを彼女は見いだしているのかなと思ひました。あまりにも生々しい、あまりにも厳し過ぎるシリアの出来事を、作家の筆を持つて描くときに、そこに生きることの美しさ、生命の美

しきみたいなものを表現することができるんじゃないのかっていう。文学者で、記録文学をやる方ってというのは、石牟礼道子さんとかスヴェトラナ・アレクシエーヴィツチさんとか、他にもいっぱいいるわけなんですけど、それぞれに特徴というか、個性みたいなものがあると思います。そのあたり、他の記録文学書かかっている作家の方と比べてみると、さらに文学論としても深まったりするかなと思います。

ナジーブさん、他にもシリアの方で、こういう記録を書いたり、映画でも、文学でもルポルタージュでも、外に向けて発信する仕事をしている人たちの中でサマルさんの評価とか、サマルさんの立ち位置みたいなことってどうでしょう。教えてもらえます？

ナジーブ シリアの知識人層の中の議論の流れと歴史について言いますと、そもそも、シリアの知識人層は主に左派であって、シリア政権も自称、左派というわけです。その二つの中で、例えば思い浮かぶのは、オマル・アミララーイ³⁴というドキュメンタリー作家です。彼は、パリの学校を卒業してシリアに帰った当初、七〇年代にはユーフラテス川のダムについてのプロパガンダ映画を作りました。しかし後になって、この政権は偽物であって、本当の左派ではないと考えるようになり、反政府になったわけです。一九六七年の第三次中東戦争までは、あんまりシリア人は自分の社会の多様性とか、それぞれの民族とか、女性、男性とかの記録に努めてなかったわけです。でもその後は、田舎に行つてドキュメンタリー作つて、人類学的な傾向も生まれてきて、自分の社会を勉強し始めたんです。それに対して政権は抑圧的でした

今のシリアの民主化運動が始まる前にはどういふ状況だったかというところ、シリア政権は全然、そういうよ

34 オマル・アミララーイ（一九四四〜二〇一一年）シリアのドキュメンタリー作家・民主活動家。

うな社会の語り部の応援はしないんです。例えば、ハサン・アッバス³⁵という方は初めて、そういう語り部の形の整った研究プロジェクトとして、シリアのいろんな所に行つて、いろんな人の話を聞いて記録するということをしました。本当にシリアでは、あんまりそういう歴史とか、組織的な動きが少ないんですけど、知識人の間では、もう長い間とても意識が高いです。

サマル・ヤズベクさんの作品については——私は、人に直接「どう思いますか」つて聞いたことはないですけれども——本が出たときの記事とか書評を読んだところでは、みんな本当に絶賛しています。とても貴重な記録になるとか、代表的なとか。彼女がこの本の前に出した、シリア革命の最初の頃の記録と二つあわせて、本当に貴重な話になっています。

岡 ごめんなさい。さきほどの議論を蒸し返して申し訳ないんだけど、酒井さんが指摘してください。ことつて、要するに、文学作品が文学作品として翻訳されて存在していたとしても、それを読む読者の側のマインドセットが、それを文学として読まない、という話だと思うんですよ。

それに対して思うのは、もちろん翻訳者が文学性というものを限りなく原著と同じレベルで訳すよう努めるというのは、それは至極当然の話です。それで思ったのは、例えば、藤井光さんが訳されたイラクの、ハサン・ブラーシムの『死体展覧会』³⁷。例えば、イラクのことに興味を持つて、あの短編集を読んだとしたら、あの作品はそのような、文学作品を情報として消費するような読みに対して本質的に抗う文学的強度をもつて書かれていますよね。



『死体展覧会』

山本 それは映画であつても文学作品であつても、その作り手の側がいかに関心なりの創造、表現としての作品を作つたとしても、何かジャーナリスティックな情報源として消費されてしまう危険性つていうのは、特に中東に関するものには、やっぱりあるかなつて思いますよね。

岡 自身、そういう反省すべき経験があります。以前、京都大学で「映像何でも見る会」という研究会があつたんです。本当に何でも見る。ドキュメンタリーでも劇映画でも、どこの国のでも。そのとき、次回はドバイのフィリピン労働者の、出稼ぎ労働者の話だと聞いて、私はてっきりドキュメンタリーだとばかり思つて見たら、これがドバイを舞台にしたフィリピン労働者の男性の兄弟が、同じ女性を好きになつちゃうという黄金の三角関係、メロドラマでした。ドバイが舞台で、東南アジアの出稼ぎ労働者の話だからドキュメンタリーだと思ひ込んでいた自分の固定観念を突き付けられました。

山本 それに関連して、柳谷さんに聞きたいんですけど、今、『シリアにて』³⁸つていう映画を岩波ホールで上映してますよね。『シリアにて』というタイトルを見ると、やっぱり、シリアのことを知りたい方が見に行くかなと思うんですけども、あれつて、完全なフィクションじゃないですか。撮つたのもベルギー

35 ハサン・アッバースはシリアの文化研究者。ダマスカス・フランス近東研究所（IFPO）の元研究員。

36 二〇一二年の『交戦（A Woman in the Crossfire: Diaries of the Syrian Revolution）』

37 ハサン・ブラーシム著、藤井光訳『死体展覧会』白水社、二〇一七年。

38 『シリアにて』（原題 Insyriated）フィリップ・ヴァン・レウ監督。ヒアム・アッバス主演。二〇一七年製作／ベルギー・フランス・レバノン合作。

人の監督さんで、俳優さんを使っている。この間、舞台解説をされていたと思うんですけど、実際、どうでした？ 見に来た人の関心と、実際の映画のギャップみたいなものって、やっぱり、あつたりしますか。

柳谷 あれはまず『シリアにて』というタイトルがすごくて。『シリアにて』とタイトルが付いてないと、どこの話か分からないという。そこなんですよね。それで、シリアを期待してきた人もいるかもしれないですけど、まず、上映館が岩波ホールということで、あそこで上映する作品を見たいという方も多くいらつしやっていたと思います。

アフタートークでは、この映画は非当事者が描いたシリア内戦だと言いました。シリア人が描く場合は、この問題において自分がどういう立場でどう考えているかという当事者性というものを必ず込めてきますけれど、『シリアにて』はベルギー人の監督が聞いた話に基づいて作ったフィクションです。しかもこの監督はあえて、自分が聞いた話（＝アレップポでの出来事）からも舞台をダマスカスに移して、当事者性をどんどん消す方向にしています。そういうふうにして、タイトル以外ほぼシリア性みたいなものを、シリアだけれどどこでもいいぐらいに打ち消したところに、この映画の価値があると思います。そうなると、これはもう政権軍と反体制派とかそういう話ではなく、暴力が日常を圧倒しつつある世界の、不安定な中でどういうふうにながらぬかという、その根本問題を出している作品ということになります。実際に見ると、観念的ではなく、ものすごく怖い映画で。確かにこれでシリア内戦が分かると思ってきた人なら、「えっ？」と思



映画『シリアにて』

うかかもしれませんが、とてもよくできた映画です。

山本 そうすると、シリアで起きている現実から離れたところで、アート作品として成立させるっていう、その距離感がすごくポイントになってきますね。あまり離れすぎて、シリアの状況を上っ面だけ利用しちゃつてる、というようにも受け取れてしまうんですけど。

岡 そうです。私はそう思います。でも、まず言っておくと、私は、映画はどんな映画でも見るべきだと思います。どんな作品であつても。たとえば『死霊の盆踊り』であつても。その上で申し上げるのですが、『シリアにて』は、映画としてはたいへんウェルメイドな作品です。作中、「レバノンに逃れることができる」という台詞と、タイトルになつている“*Infiltrated*”という造語から、シリアが舞台であることがほのめかされているわけですが、作品の眼目は、極限状況に置かれた人間の心理的な葛藤を描くことにある。シリアの何も描かれてはいない。単にシリアが今、こういう暴力的な状況だから、そこを舞台装置として借りてきたというだけにしか見えない。倫理的に問題ではないか、という気さえします。

山本 ナジーブさんは見ました？

ナジーブ 見ました。まず先ほど私がお話した、紛争の前に行われていた語り部のプロジェクトは、フランスの組織が支援していたんですけれども、シリアの知識人層にはちよつと問題があると思うんです。ヨーロッパ中心主義とか、欧米中心主義の問題は世界的な問題ですけど、特にアラブ世界に対しては深刻です。

例えば、南米の文学に対しては、もつと敬意が払われていて、勝手なことではできない感じがあります。アラブ文学だけでなく、アラブの何でも、例えばアラブの映画はこの三十年間ずっと、いい作品は全部フランスの資金援助を受けています。実際に、私は一度、ダマスカスの喫茶店でウサーマ・ムハンマド監督に聞いたことがあるんです。「なぜ、そういう感じになつてるの？」と訊いたら、彼は「シリア人の知識人は本当に怠けている」と言つたんです。ちゃんとしてないというふうには、本人が私に言つて、衝撃だつたんですけど、私もそう思うんです。

日本人だつたら、どつかの東北の語り部の記録したい人は、コンビニでアルバイトしながらでもする姿とか、イメージとしてあるじゃないですか。目的があつて、何かやりたい。それが結局、すごい文化的なプロジェクトを生むんです。シリア人はしないんです。喫茶店に座つて、そしてフランスからお金が来るか、あるいはシリアの映画総局から予算は下りるけど、結局、それは海外の映画祭で見せない作品として作らせてもらえるとか、不自然な所があつて。本当に植民地主義はすごく関係してるんです。世界がといつたら、結局、ヨーロッパなんです。例えば、私の友達、ハーリド・ハーリーフ⁴⁰の小説は、今、どんどんいろんな言葉に翻訳されてるんですけど、本人と話すと、すごくそういう問題があるんです。すごくヨーロッパは上から見てくる。他の文化にはできないぐらい、東南アジアとか南米とか、日本に対してはできないぐらい、すごく偉そうで、優越感があるんです。それに対して、シリア人、アラブ人の知識人は、本当に劣等感を持つていると思つています。そういう問題はあると思ひます。

山本 だから、シリア人が本当に覚悟を持つて表現をしないと、結局、題材だけヨーロッパ人に奪われて。表象する権利まで奪われていいのか、シリアの問題を題材としてだけ、上っ面だけ盗まれて黙つているの

か、みたいなことですよ。日本人も欧米の権威に弱いですけど、アラブの知識人の中にもやつぱり、そういう傾向はあるっていうのは、ナジブさんだからこそ、自己批判的に言えることなのかもしれません。

39 ウサーマ・ムハンマド（一九五四年〜）シリア人映画監督。『シリア・モナムール』（シリア・フランス合作、二〇一四年）

40 が山形国際ドキュメンタリー映画祭2015で優秀賞受賞

ハリッド・ハリーフア（一九六四年〜）シリア人小説家、脚本家。イスラーム主義者への弾圧など、シリア国内ではタブーとされてきたテーマを描く反体制的な姿勢で知られ、世界各国語に作品が翻訳されている。

パネリスト紹介（五〇音順）

鵜飼 哲（うかい さとし）

一九五五年生まれ。一橋大学名誉教授。フランス文学・思想、ポスト植民地文化論。著書に『主権のかなたで』（岩波書店、二〇〇八年）、『テロルはどこから到来したか』（インパクト出版会、二〇二〇年）など。

岡 真理（おか まり）

一九六〇年生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。現代アラブ文学。著書に『アラブ、祈りとしての文学』（みすず書房、二〇〇八年）、『ガザに地下鉄が走る日』（みすず書房、二〇一八年）など。

岡崎 弘樹（おかざき ひろき）

一九七五年生まれ。日本学術振興会特別研究員（PD）。アラブ近代政治思想・シリア文化研究。著書に『アラブ近代思想家の専制批判——オリエンタリズムと〈裏返し〉のオリエンタリズム〉の間』（東京大学出版会、二〇二二年）、『イスラームの啓蒙思想』伊藤邦武ほか編『世界哲学史VI 近代①啓蒙と人間感情論』第八章（筑摩書房、二〇二〇年）など。

酒井 啓子（さかい けいこ）

一九五九年生まれ。千葉大学グローバル関係融合研究センター長。地域研究・イラク政治。著書に『フ

セイン・イラク政権の支配構造』(岩波書店、二〇〇三年)、『9・11後の現代史』(講談社現代新書、二〇一八年)など。

ナジブ・エルカツシュ

一九七三年シリア生まれ。ジャーナリスト、リサーラ・メディア代表。一九九七年に来日。東京大学、名古屋大学にて映画理論を研究。北東アジアを取材し、アラブ諸国のメディアに配信。文化交流の分野でも活躍している。

柳谷 あゆみ (やなぎや あゆみ)

一九七二年生まれ。公益財団法人東洋文庫研究員、上智大学アジア文化研究所共同研究員。中世イスラーム政治史、現代アラブ文学。訳書にザカリーヤ・ターミル『酸っぱいブドウ／はりねずみ』(白水社、二〇一八年)、アフマド・サアダーウィー『バグダードのフランケンシュタイン』(集英社、二〇二〇年)など。

山本 薫 (やまもと かおる)

一九六八年生まれ。慶應義塾大学専任講師。アラブ文学。訳書にエミール・ハビービー著『悲楽観屋サイドの失踪にまつわる奇妙な出来事』(作品社、二〇〇六年)、著書に「中東のラップをめぐる力学とアイデンティティ形成——DAMの事例を中心に」福田宏・後藤絵美編『グローバル関係学5「みえない関係性」をみせる』岩波書店、二〇二〇年など。

グローバル関係学 Online Book Launch

シリア知識人との対話

ヤシーン・ハージュ・サーレハとサマル・ヤズベク

[発行日] 2021年1月30日

[編者] 山本 薫

[発行所] 〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町 1-33
千葉大学・グローバル関係融合研究センター内
「グローバル関係学」事務局
Tel. 043-290-2334
代表メールアドレス：gblcrss@chiba-u.jp